

北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相

杉 崎 茂 樹

はじめに

1. 後期前方後円墳の展開とその終末
2. 前方後円墳終末後の有力古墳

3. 群集墳の築造と古墳の終焉

まとめにかえて

論文要旨

まず最初に、古墳時代後期の北武蔵各地域での前方後円墳の築造状況を概観する。

北武蔵の90基ほどの前方後円墳は大半が後期の築造とみられ、後期に前方後円墳の築造が急激に増大する。

特に、同時期のわが国全体でも、屈指といえる規模の大形前方後円墳が、前代までさしたる古墳のない埼玉県北部の行田市の埼玉古墳群と周辺地区に突然として出現し、およそ1世紀の間、築造が継続されることが特筆される。墳丘規模の卓越性から、その被葬者は畿内政権を後ろだてに広域を統治した新興の北武蔵の最高首長層だったと推定される。

このほか各地域で後期に至り多くの中小規模の前方後円墳が出現しており、これらは大形前方後円墳の下位に位置する小地域首長層の古墳と考えられる。

しかし、6世紀末ないし7世紀初頭段階に前方後円墳の築造は規模の大小を問わず停止するに至る。かわって有力首長層が自己の墳墓型式に採用したのは大形の円墳や方墳だった。こうした動きは、当時の畿内首長層の前方後円墳廃絶およびその後の造墓活動と対応した動きであった。

次に、北武蔵での小首長層の台頭を物語る後期群集墳の消長は、大形前方後円墳の築造開始と期を一にして生起するものや前方後円墳の廃絶とほぼ同時期に生起するものなど一様でなく、個性がある。そして築造停止の時期もまた各様であるが、8世紀初頭までに築造が停止されている。

こうした現象は同時に古墳の築造停止、すなわち古墳時代の終焉を意味し、その背景には古墳という葬制を介した地方勢力の統治がもはや畿内政権にとっても地方勢力にとっても形骸化したことを示す。すなわち、これにかわる律令的身分制度の波及が予想された。

はじめに

「北武蔵」は、ほぼ現在の埼玉県に相当する地域で、地理的には利根川を境に北を毛野（群馬県）、東を下総（千葉県）に、西を秩父山地で信濃（長野県）、甲斐（山梨県）に接した、荒川の上・中流域、関東平野の中西部域である。

この地域の古墳時代の特色は、その前・中期に際立った大形古墳の築造を見ないのにもかかわらず、後期に至り、全長が100mを超える、後期としては大形の前方後円墳が継続して築造されていることだろう。

小稿では、こうした後期前方後円墳の展開と終末、そしてその後の首長墓の築造状況や同時に出現した群集墳の消長など、北武蔵域の古墳時代後期から終末期にかけての古墳時代の諸様相について述べることにする。

1. 後期前方後円墳の展開とその終末

古墳時代前・中期の南武蔵域、とくに多摩川下流域では、大形前方後円墳である川崎市白山古墳や東京都大田区蓬萊山古墳などの有力首長墓が継続して築造されている。しかし、このこととは対照的に、北武蔵では、大形前方後円墳はもちろん、その他の大形古墳もほとんど築造されていないことから、北武蔵は「政治的空白地帯⁽¹⁾」と評価されたこともある。

しかし、後期に至り南武蔵域では大形古墳の築造がほとんど行われなくなったのに対し、北武蔵では逆に陸続と大形前方後円墳⁽²⁾の出現をみる。

ちなみに、北武蔵域には約90基の前方後円墳が知られているが、その大部分は後期（およそ6世紀代）の築造かまたはその可能性が強い。

以下、北武蔵各地域の後期前方後円墳の築造状況を便宜的に現在の郡域ごとにみていくことにするが、大形前方後円墳の集中する埼玉古墳群については、別立てとして、まず最初に取り扱うことにしよう。

1 埼玉古墳群の前方後円墳

埼玉古墳群は、埼玉県中北部、古利根川と元荒川に挟まれた旧埼玉郡域の行田市埼玉に所在する。低位のローム台地上に100mを超える大形前方後円墳5基を中核とし、中・小形の前方後円墳5基、大形円墳1基が計画的に築造されており、その他20基程の円墳で構成されている。

埼玉古墳群中の前方後円墳群は、詳細は後に触れるが、概ね6世紀代を中心とした築造時期が考えられる。とりわけて、大形前方後円墳が間断なく築かれている事実は、この期間に、同古墳群を出現させた集団の最高位の首長層が、武蔵域の広範囲に及ぶ強力な政治権力を連綿と保持していたことを物語っており、『日本書紀』に見える武蔵国造家の墳墓群である可能性が極めて高

い。

5基の大形前方後円墳のうち、最初に出現したのが、稲荷山古墳⁽³⁾である。群中の前方後円墳としては最も北に位置しており、すでに前方部は土採取で失われているが、前方部を南西に向け、主軸長 120 m、二重の長方形周堀を巡らしている。外堀と内堀の間の中堤には、後円部西方の部分で、外方に突出する方形の造出が確認されており、その周囲の周堀から人物をはじめとした形象埴輪が出土し、埴輪祭祀の行われた場であることが判明している。

主体部は後円部頂から発見された粘土槨及び礫槨である。

粘土槨は中心から前方部寄りの位置に、主軸にほぼ直交して築かれていたが、盗掘であまり遺物は残されていなかった。

一方、中心からやや西に偏した位置の礫槨は船形をしており、遺存状況は良好であった。金錯銘鉄剣をはじめ、直刀、槍、鉄鏃、挂甲などの武器、武具類、三環鈴、鈴杏葉、f 字形鏡板付轡、木札鉄板張輪鐙、鞍金具などの馬具類、金銅製帯金具、硬玉製勾玉、銀製耳環などの装身具類、半円方形帯画文帯神獣鏡、そして鉄斧、砥石などの農工具類が出土した。

古墳の築造時期は、礫槨出土の遺物群については、6世紀初頭頃の年代を示すものであり、墳丘出土と伝えられるTK23型式の須恵器群を手掛かりに、5世紀後葉頃とする見解が有力である⁽⁴⁾。

稲荷山古墳に引き続き築造された大形前方後円墳は、稲荷山古墳の南方に所在する二子山古墳⁽⁵⁾である。全長 135 m、後円部高 11 m と、稲荷山古墳より一回り大きい。古墳群内はもとより、古墳時代全期間を通じ、武蔵域内最大の方後円墳であり、『日本書紀』に見える武蔵国造笠原直使主の墳墓に擬する説もある⁽⁶⁾。周堀は部分的な調査で、稲荷山古墳同様、長方形の二重周堀で、中堤部方形造出、括れ部造出の存在が確認されている。主体部は未調査だが、周堀出土の埴輪や須恵器片は、稲荷山古墳のものよりやや後出的特徴を有しており、築造時期を 6 世紀前半代に求めてよいだろう。

二子山古墳の南方に所在する鉄砲山古墳⁽⁷⁾も、全長 110 m、後円部高 8 m と、前方部、後円部高が拮抗する大形前方後円墳である。稲荷山、二子山両古墳同様、長方形の二重周堀を有し、括れ部西側に造出の存在が推定できる。主体部は未調査だが、周堀出土の埴輪や須恵器片から、二子山古墳より新しい築造時期の推定が可能であり、6 世紀後半代とみてよいだろう。

二子山古墳東方の將軍山古墳⁽⁸⁾も、全長 100 m を超える規模を有している。

將軍山古墳の現状は、だいぶ損壊が著しいが、遺存長でも 102 m を測る。周堀の形態は、部分的な調査ながら、二重周堀とみられ、埴輪片が出土している。主体部は後円部南側の横穴式石室で、壁材を千葉県産の房州石（砂質凝灰岩）、天井石を県内秩父方面産の緑泥片岩で構築してあったというが、宅地化による破壊で、現在を見る影もない。

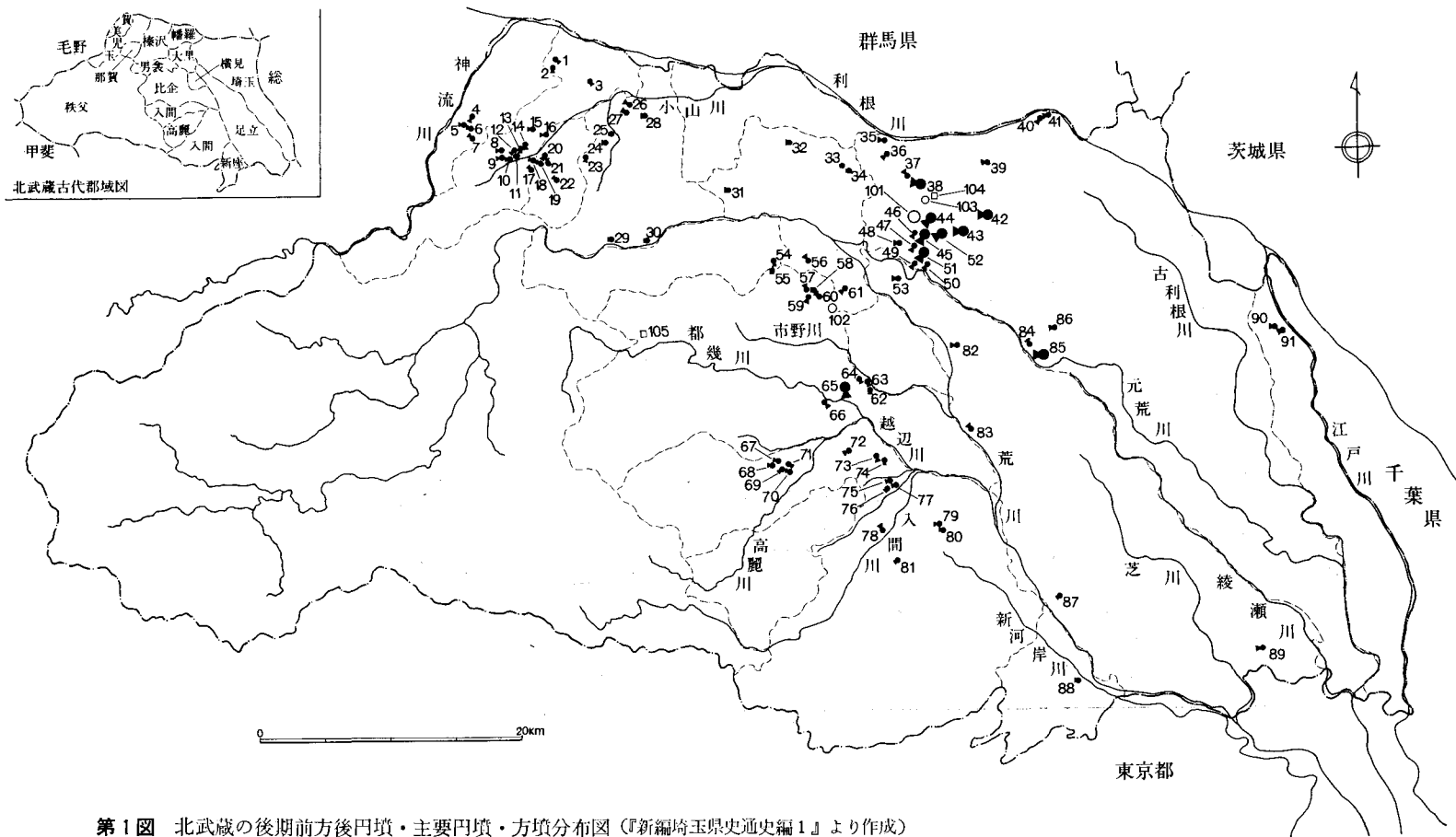
この石室は、その一部が露出したため、地元村民により、明治 27 年に発掘され、多数の優秀な遺物が出土している。主なものとしては、銀装大刀、金銅環頭大刀、直刀、矛、鉄鏃、挂甲小札、横矧板鋌留衝角付冑などの武器、武具類、素環鏡板付轡、金銅棘葉形杏葉、鉄製輪鐙、金銅雲珠、

表1 北武蔵の後期前方後円墳・主要円墳・方墳

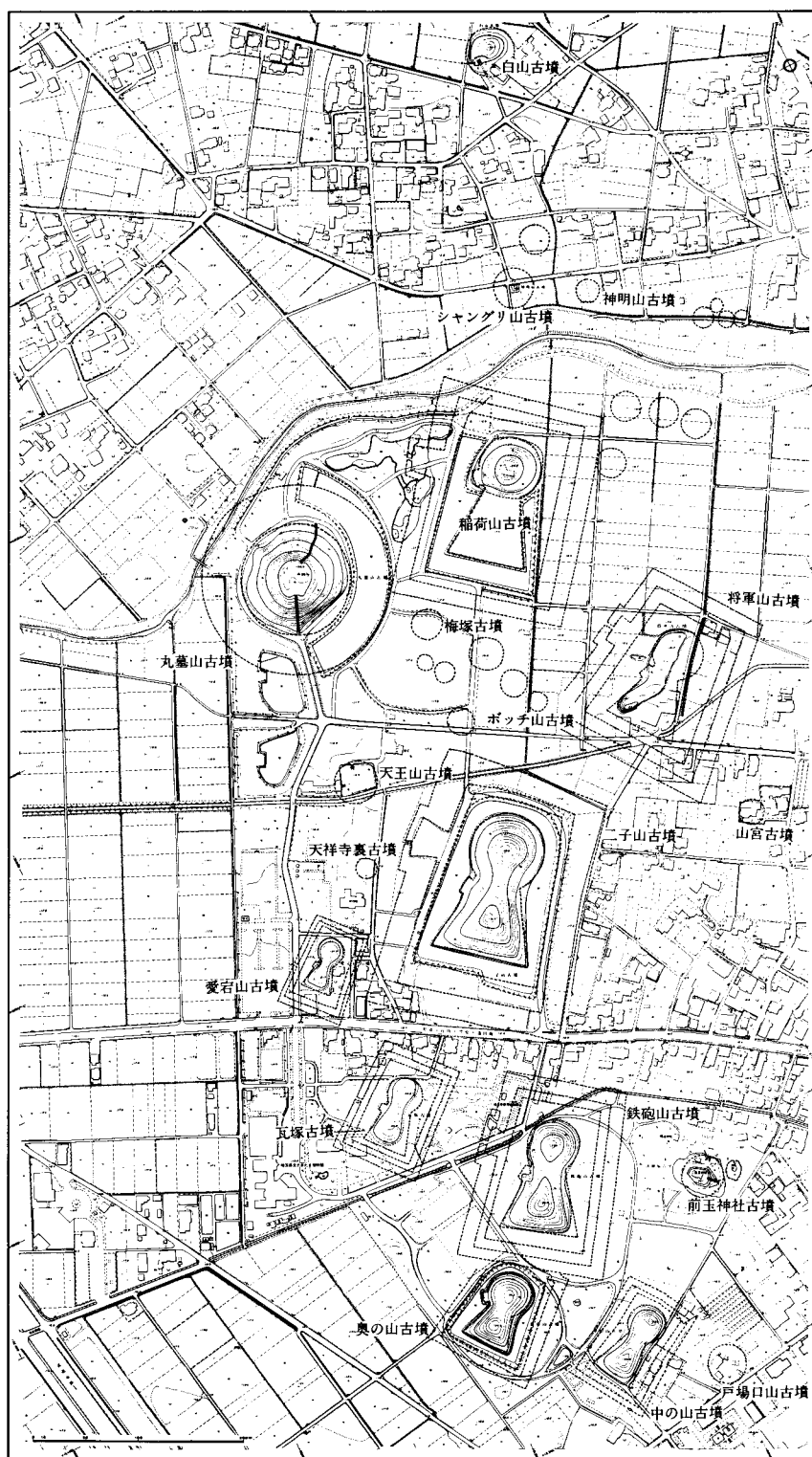
備考空欄は前方後円墳

No.	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)	No.	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)	No.	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)
1	三空山7号墳	本庄市小島				32	横塚山古墳	熊谷市中奈良	(30)	帆立貝式	39	63	宿東1号墳	東松山市古凍		造出付円	
2	下野堂二子山古墳	本庄市下野堂			80	33	女塚古墳	熊谷市中条	46	造出付円	91-②	64	天神山古墳	東松山市柏崎	62.5		45
3	塚合二子山古墳	本庄市日の出				34	鑑塚古墳	熊谷市中条	43	"	91-①	65	野本將軍塚古墳	東松山市下野本	115		47
4	中新里諏訪山古墳	神川村中新里	42		31	35	酒巻1号墳	行田市北河原	50		26	66	諏訪山古墳	東松山市西本宿	68		94
5	北塚原9号墳	神川村新里	29			36	とやま古墳	南河原村犬塚	69		25	67	坂戸130号墳	坂戸市善能寺			
6	南塚原9号墳	神川村新里	24.5		32	37	虚空蔵山古墳	行田市小見			28	68	" 133号墳	坂戸市善能寺			
7	白岩鏡子塚古墳	神川村新里	46		32	38	小見真観寺古墳	行田市小見	112		21	69	" 128号墳	坂戸市善能寺			
8	長沖137号墳	児玉町高柳				39	毘沙門山古墳	羽生市上羽生	63		26	70	毛呂山1号墳	毛呂山町川角			
9	" 110号墳	児玉町高柳				40	御廟塚古墳	羽生市下村君	30		26	71	坂戸105号墳	坂戸市善能寺			
10	" 十兵衛塚古墳	児玉町長沖	37		32	41	永明寺古墳	羽生市下村君	78		27	72	桐山古墳	坂戸市石井	63.2		26
11	" 8号墳	児玉町児玉	26.3	造出付円	75	42	真名板高山古墳	行田市真名板 兼師堂境内	104		23-②	73	雷電塚古墳	坂戸市小沼	52.4		26
12	" 25号墳	児玉町児玉	40		75	43	若王子古墳	行田市埼玉	103		11	74	牛塚山古墳	坂戸市横沼			
13	" 32号墳	児玉町児玉				44	埼玉稲荷山古墳	行田市埼玉	120		3	75	浅間塚古墳	坂戸市中小板			
14	" 31号墳	児玉町児玉				45	" 二子山古墳	行田市埼玉	135		5	76	下小坂4号墳	川越市下小坂			
15	生野山鏡子塚古墳	児玉町入浅見	58		32	46	" 愛宕山古墳	行田市埼玉	53		16	77	西原古墳	川越市下小坂	31.8	帆立貝式	48
16	" 16号墳	児玉町児玉	52		30	47	" 瓦塚古墳	行田市埼玉	71		17	78	牛塚古墳	川越市市場	47		48
17	秋山諏訪山古墳	児玉町秋山				48	大人塚古墳	行田市埼玉			11-①	79	日枝神社古墳	川越市小仙波町			
18	広木大町8号墳	美里町広木			78-①	49	埼玉奥の山古墳	行田市渡柳	68		17-③	80	慈眼堂古墳	川越市小仙波町			
19	" 9号墳	美里町広木			78-①	50	" 中の山古墳	行田市渡柳	79.2		17-③	81	南大塚1号墳	川越市豊田本	36	帆立貝式	101-②
20	" 魂湖40号墳	美里町広木		造出付円		51	" 鉄砲山古墳	行田市埼玉	110		7	82	將軍塚古墳	鴻巣市流馬室 常勝寺境内			55
21	" 両子塚古墳	美里町広木	28		32	52	" 將軍山古墳	行田市埼玉	102		8	83	川田谷ひきご塚古墳	桶川市川田谷	41		53
22	大仏二子塚古墳	美里町白石	43		32	53	三島神社古墳	吹上町明用	50		26	84	大塚塚古墳	菅浦町上楢間	45		
23	諏訪山古墳	美里町古郡	39	造出付円	32	54	野原古墳	江南町野原	40		33	85	天王山塚古墳	菅浦町上楢間	107		24
24	西山5号墳	美里町関 岡部町山崎	31			55	円正寺古墳	滑川町上塩				86	東浦古墳	菅浦町小林			
25	千光寺1号墳	岡部町山崎	28	造出付円		56	伊勢山古墳	熊谷市楊井	41		34	87	塚山古墳	浦和市塚本		円墳か	
26	四十塚寅稲荷古墳	岡部町岡	51		32	57	秋葉塚古墳	東松山市大谷	44.5		40, 41	88	終塚古墳	朝霞市関三丁目	60	帆立貝式	
27	千手堂御手長山古墳	岡部町岡	45		32	58	雷電山古墳	東松山市大谷 大雷神社境内	86	帆立貝式、中期		89	高稲荷古墳	川口市峯	75	前期	
28	白山17号墳	岡部町岡	28	造出付円		59	長塚古墳	東松山市大谷	33		40, 41	90	目沼2号墳	杉戸町目沼		旧下総国域	26
29	小前田2号墳	寄居町中前田				60	弁天塚古墳	東松山市大谷	35		40, 41	91	目沼瓢箪塚古墳	杉戸町目沼	38	"	69-①
30	黒田2号墳	花園町黒田	(31)		23-②	61	とうかん山古墳	大里村箕輪	74		26						
31	三ヶ尻二子塚古墳	熊谷市三ヶ尻				62	おくま山古墳	東松山市古凍	62	帆立貝式	45						

№	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)	№	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)	№	古墳名	所在地	規模 (主軸長)	備考	文献 (註番号)
101	丸墓山古墳	行田市埼玉	105	円	8-②	103	八幡山古墳	行田市藤原町	74	円	58	105	穴八幡古墳	小川町増尾	31	方	66
102	甲山古墳	太里村青山	90	円	26	104	地藏塚古墳	行田市藤原町	28	方	60, 61						



第1図 北武蔵の後期前方後円墳・主要円墳・方墳分布図(『新編埼玉県史通史編1』より作成)



第2図 埼玉古墳群分布図〔註(7)の文献より作成〕

銅鈴、蛇行状鉄器、馬冑等の馬具類、乳文鏡、ガラス玉、銅鏡、須恵器である。これらの副葬品のうち、須恵器など一部6世紀後半代でもやや古い可能性を示すものもあるが、銅鏡など6世紀末葉以降と考えられる遺物群から、古墳の築造時期も6世紀末葉頃に考えるのが妥当であろう。

以上の4基は互いに隣接して築かれているが、これらとはやや離れた位置、稲荷山古墳の600mほど東方に、かつて若王子古墳という大形前方後円墳が所在していた。現在では全く煙滅してしまっているが、墳丘を復原すると、100mを若干超え、前方部を西方に向けていた。主体部は、角閃石安山岩を壁材とし、秩父地方産の緑泥片岩を天井石とした横穴式石室で、内部に石棺を包蔵していたらしい。

出土遺物としては、甲冑残欠や馬具、須恵器があったといわれる。それらのうちの須恵器が現存するが、その型式(TK43)から、古墳の築造時期は6世紀後葉と推定される。

埼玉古墳群中の大形古墳としては、ほかに大円墳の丸墓山古墳がある。前方後円墳ではないが、同古墳群の首長権の推移を考えるうえで無視できない存在であり、少々触れておくことにする。

丸墓山古墳は、稲荷山古墳の西方に隣接して所在し、直径105m、高さ18m、幅37mの周堀を巡らす大形の円墳である。かつて、5世紀後半代、稲荷山古墳に先行した時期に考えられたこともあったが、埴輪の特徴からは、稲荷山古墳よりやや後出した時期に判断されるに至っている。

円墳とはいえ、墳丘の築成土量は前述の大形前方後円墳の稲荷山古墳や二子山古墳のそれと決して遜色はない。そうした点で、丸墓山古墳の被葬者は、前方後円墳の築造が可能な実力を当然有していたと考えられるが、何らかの理由で「前方後円墳」の墳形を採用し得なかったものと推察される。

埼玉古墳群には、大形前方後円墳とともに、5基の中小の前方後円墳も築造されており、前方後円墳を築いた首長層の重層的なあり方を示している。

愛宕山古墳は、二子山古墳の西方に位置し、全長53mと群中の前方後円墳中最小規模である。主体部は不明だが、大形前方後円墳同様、二重の長方形周堀を持つ。出土した埴輪の特徴からすると、二子山古墳とほぼ同時期の築造とみられる。

瓦塚古墳は、愛宕山古墳の南方に位置し、全長71m、長方形の二重周堀を有する。周堀出土の須恵器片から、築造時期は6世紀前半代のやや新しい時期と考えられた。そして、特筆すべきこととして、古墳西側の外堀から、人物や家など多くの形象埴輪の出土した点がある。これらの埴輪の出土状況は、中堤からの転落を想定させるもので、多数の形象埴輪を中堤外縁部分に樹立して埴輪祭祀が行われたことを物語っている。

奥の山古墳は、鉄砲山古墳の南西に隣接して所在する、全長63mの前方後円墳である。主体部はもちろん、周堀の形態も完全には明らかでなく、鉄砲山古墳のそれとの重複も当然予想される位置関係にある。

時期的には、周堀出土の埴輪片から、6世紀後半代と考えてよく、鉄砲山古墳とはさほど隔たりにないものと判断される。

奥の山古墳の東方には、全長79mの前方後円墳、中の山古墳⁽¹⁹⁾が所在している。かつて、その東方にあったとされる戸場口山古墳(墳形は不明)及び、前述の奥の山古墳とともに、3基の古墳が東西に並ぶように、所在したことから「渡柳三古墳」(渡柳は小字名)の名称があったが、その中央に位置する古墳である。

主体部は不明だが、かつて石棺の出土したという伝承がある。

周堀については、最近の調査で、長方形(もしくは多角形の可能性がある)の二重周堀を有することが判明した。

また、この際に底部に焼成前穿孔の須恵器甕が多数出土している。これらの甕は、他にあまり類例を見ない器形をしており、用途としては埴輪の代用として樹立されていたものとみて誤りない。共伴する須恵器に6世紀末葉頃の様相を示すものがあり、古墳の築造時期についても、ほぼ同様の年代と考えてよいだろう。

このほか、埼玉古墳群内には、今は全く消滅してしまったが、奥の山古墳の西方に大人塚古墳⁽²⁰⁾と呼ばれる前方後円墳があった。

往時には墳丘高が3mばかりの高さで遺存していたことが知られており、おそらく、主軸長が50~60m規模の前方後円墳であったものと思われる。人物埴輪の出土も伝えられており、6世紀代の築造とみてよいだろう。

2 埼玉郡域の後期前方後円墳

埼玉郡域は、現在の行政区画の南・北埼玉郡を併せた、元荒川、古利根川で囲まれた地域である。

北武蔵域の後期に属する大形前方後円墳は、埼玉古墳群以外にも4基が存在するが、比企郡域の野本將軍塚古墳以外は、埼玉古墳群と同じ埼玉郡域の北西部に所在している。

小見真観寺古墳⁽²¹⁾は行田市小見に所在し、全長112m、後円部南側に横穴式石室1基と、その北側の後円部中腹に石槨が1基、都合2基の主体部を有する。

横穴式石室は、その石材の全てを秩父方面産の緑泥片岩にて構築し、玄門を一枚板をくり抜いてつくるなど、当地域では特異な構造⁽²²⁾といつてよい。

一方の石槨も同質の石材でつくられており、明治13年に時の内務省博物局の指導にて発掘され、遺物が出土している。その内容は、耳環(3)、圭頭大刀、頭椎大刀(2)、刀子、鉄鏃、挂甲小札、銅鏡、有蓋脚付銅鏡、堅矧広板鋌留衝角付冑、須恵器、であり、7世紀前半代の所産と考えられる。

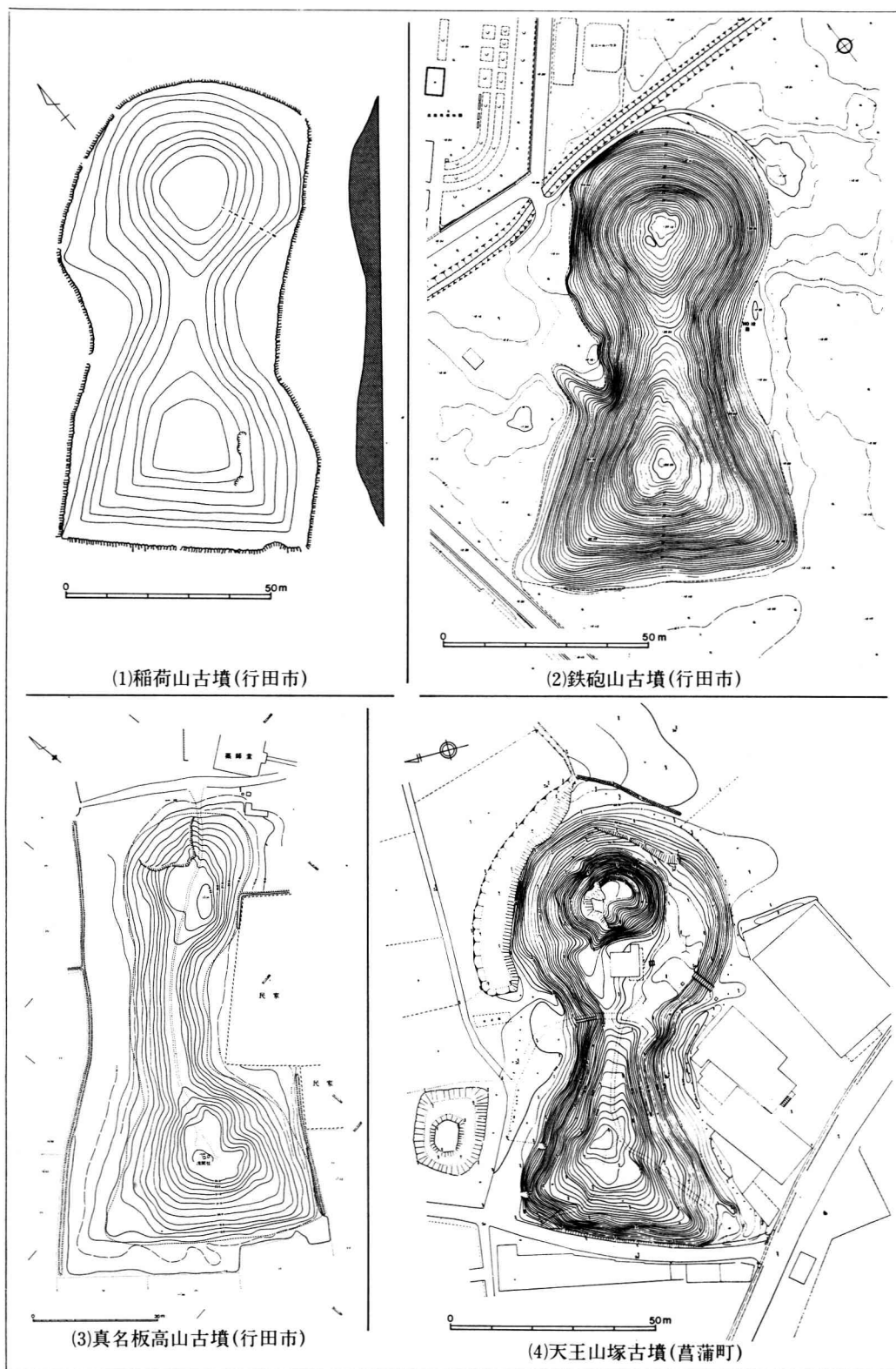
古墳の築造時期は、古墳の本来的な埋葬施設である横穴式石室が古くから開口し、遺物が全く伝えられていないので、石槨出土遺物から推定する他はないが、おそらく、7世紀初頭を甚しく下ることはないであろう。

もう1基の真名板高山古墳⁽²³⁾は、同市東部の真名板地区に所在している。墳丘は後円部を中心に損壊が激しいが、近年の測量調査の結果、全長104mと判明した。主体部や周堀については現在

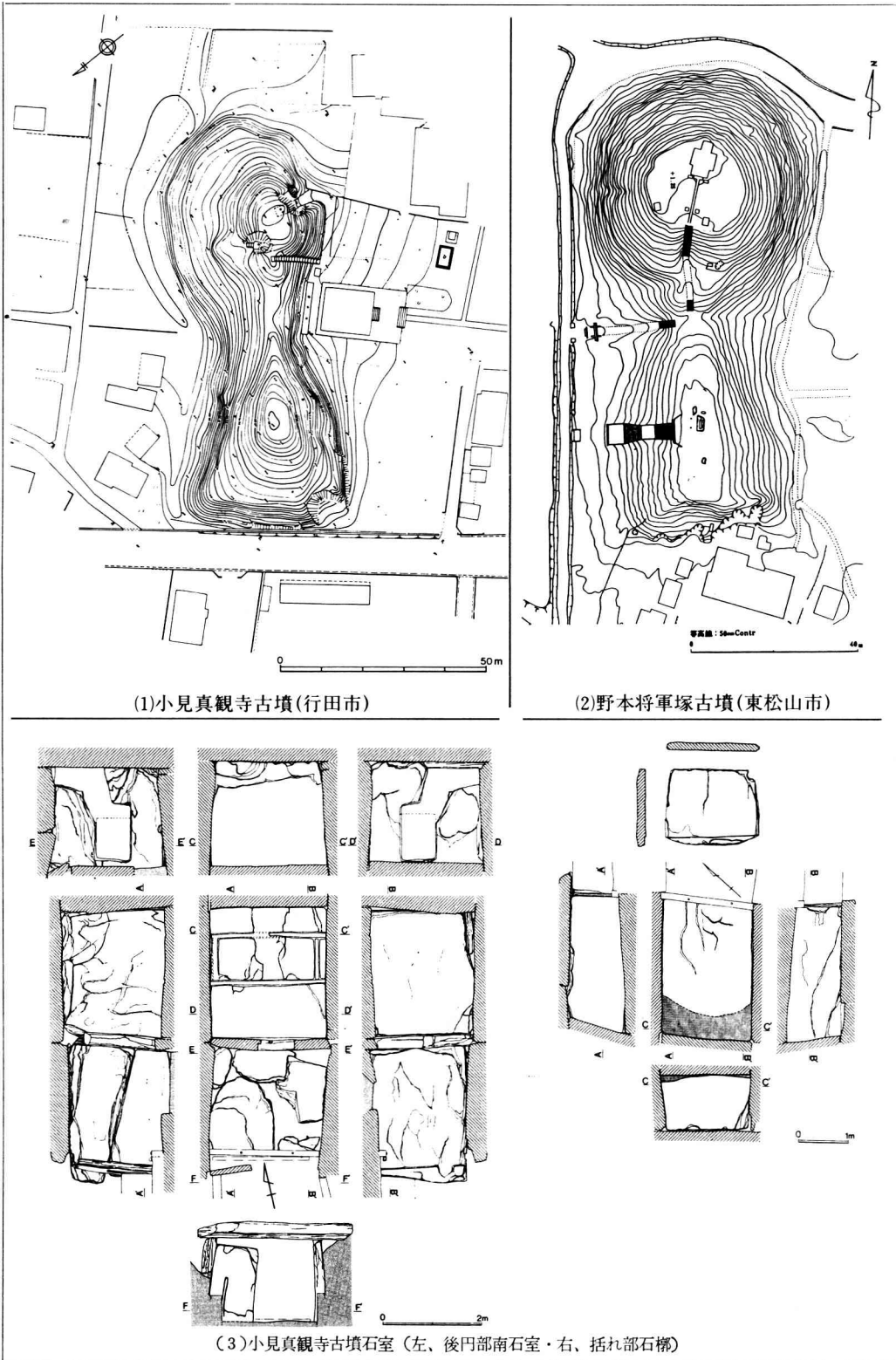


第3図 北武蔵の前方後円墳集成1 (1/600)

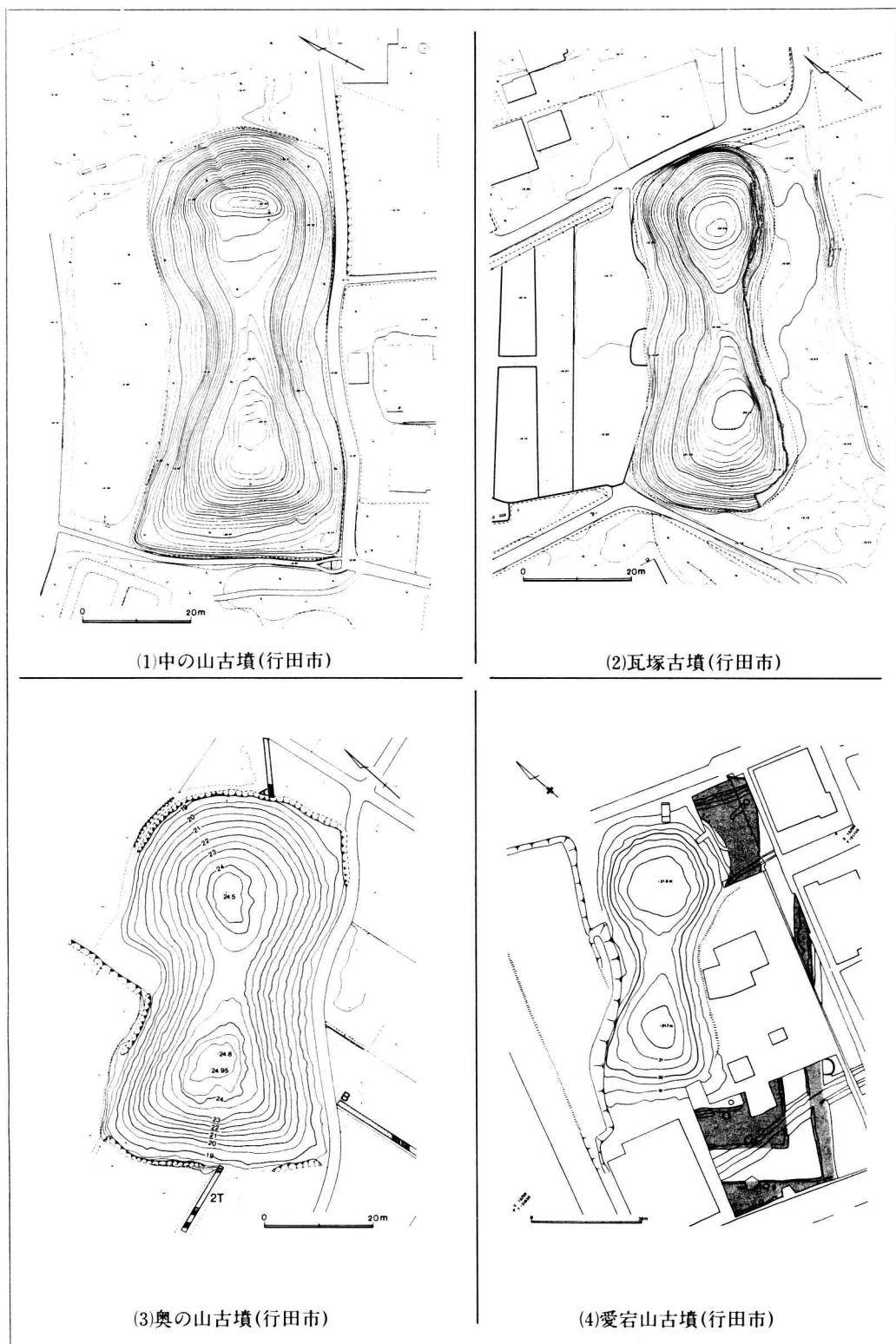
[註(5)の文献より転載]



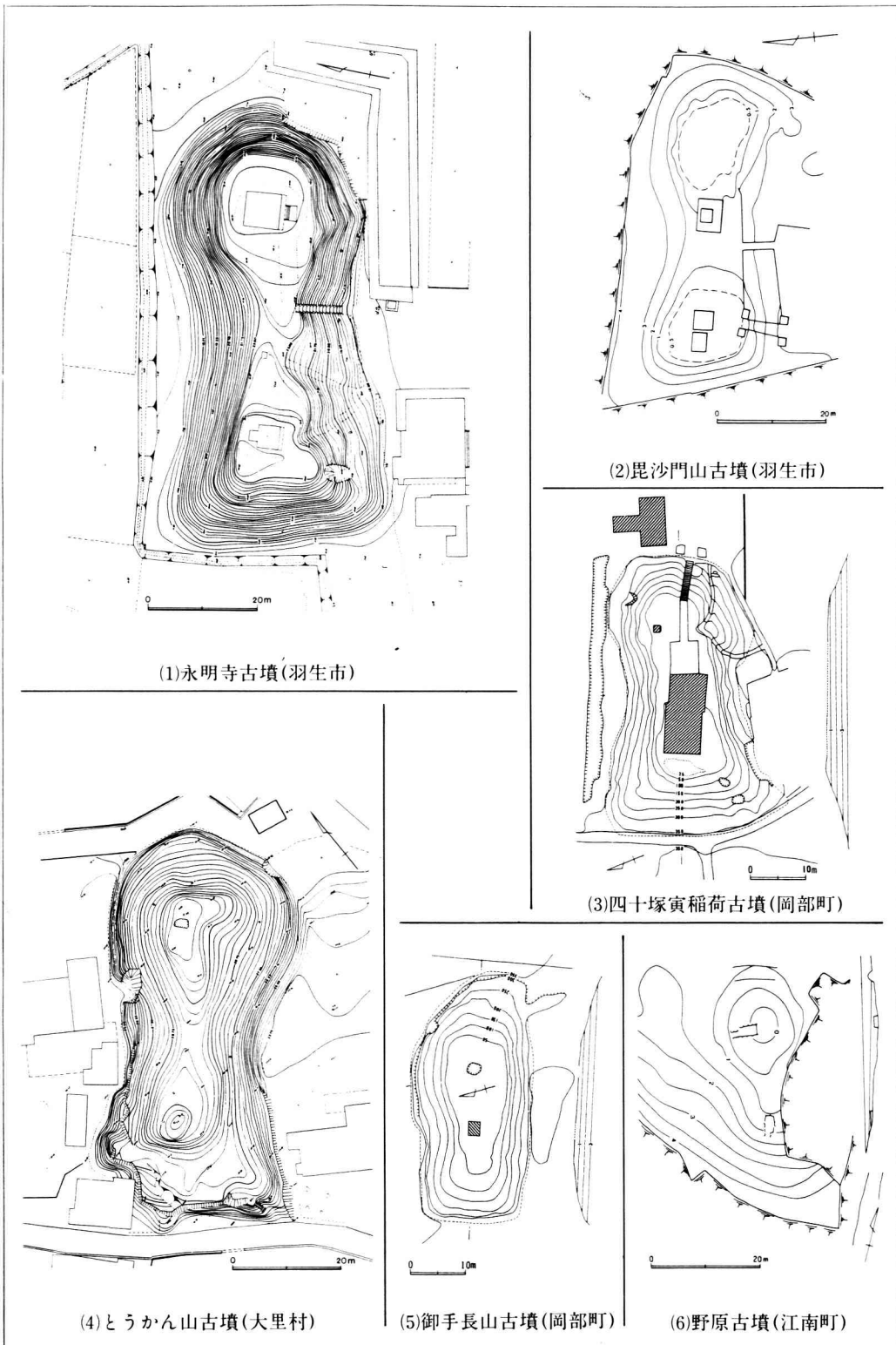
第4図 北武蔵の前方後円墳集成2 (1/1600 各文献から転載)



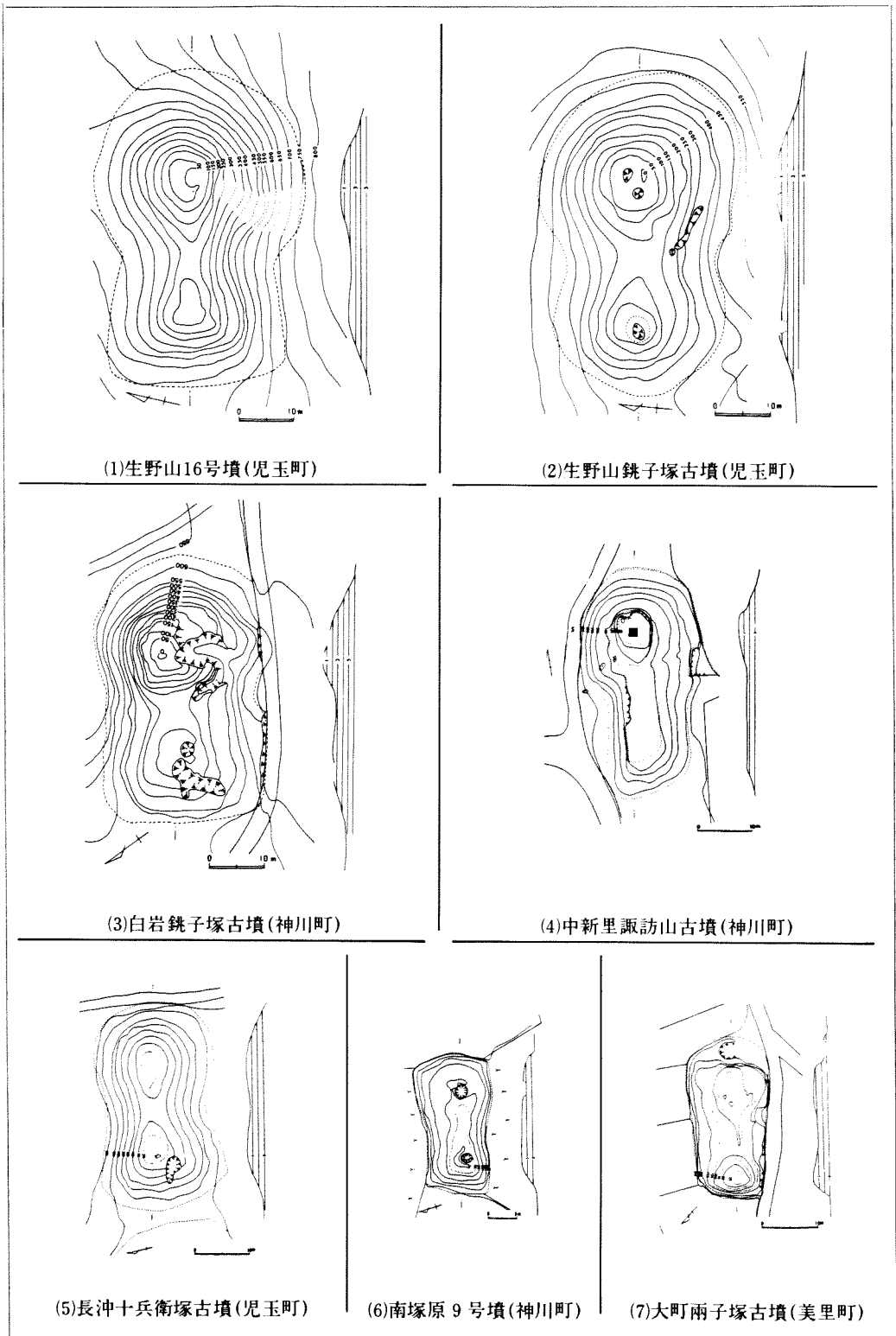
第5図 北武蔵の前方後円墳集成3 (1/1600 各文献から転載)



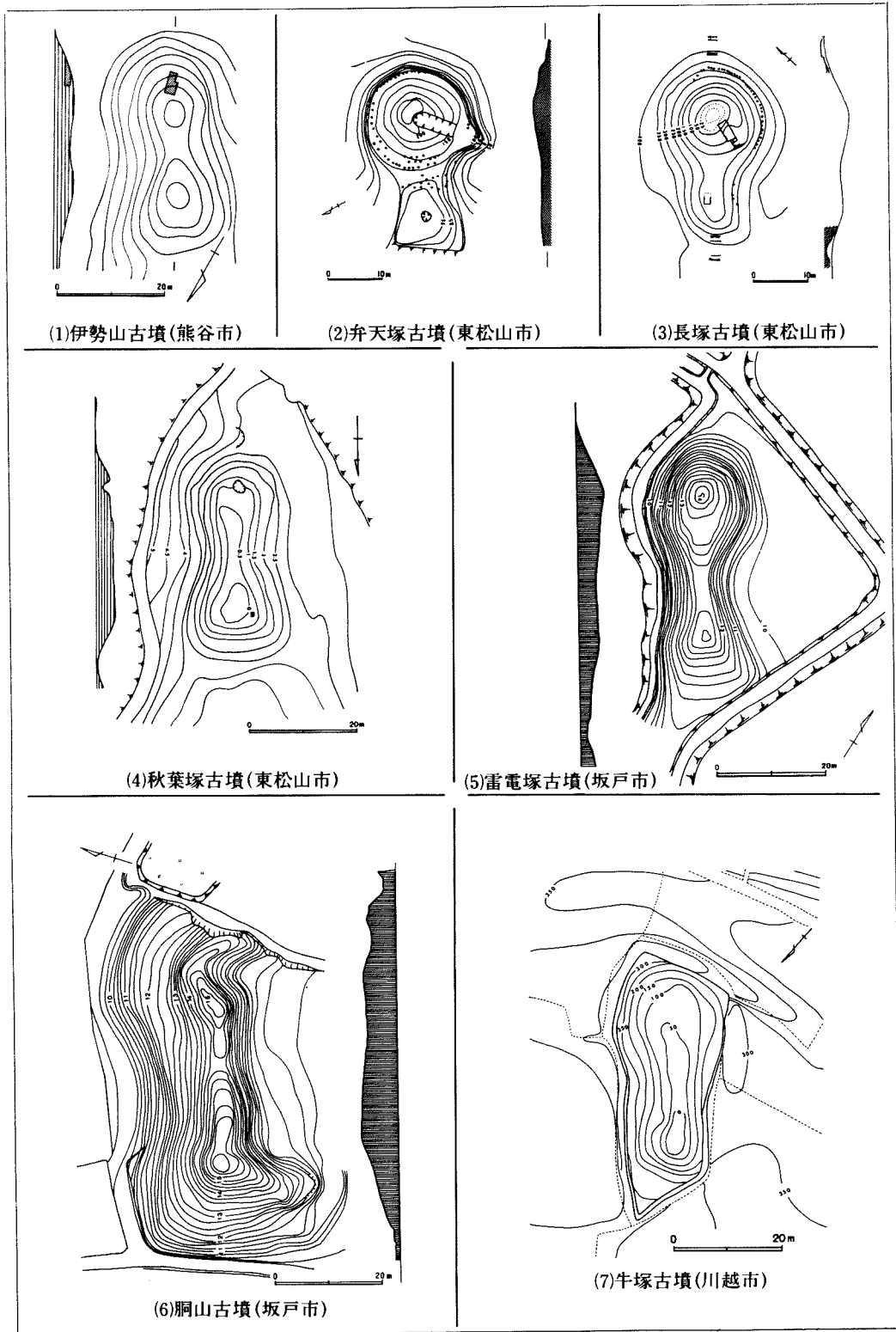
第6図 北武蔵の前方後円墳集成4 (1/1200 各文献から転載)



第7図 北武蔵の前方後円墳集成5 (1/1200 各文献から転載)



第8図 北武蔵の前方後円墳集成6 (1/1200 各文献から転載)



第9図 北武蔵の前方後円墳集成7 (1/1200 各文献から転載)

のところ全く不明だが、墳丘周辺から表採される埴輪片などからすると、6世紀後半代の可能性が強い。

残るもう1基の大形前方後円墳は⁽²⁴⁾菖蒲町下栢間の天王山塚古墳である。元荒川左岸の自然堤防上に立地し、全長108m、主体部は横穴式石室と推定されている。墳丘から採取される埴輪片や須恵器片から、6世紀後葉の築造時期が考えられる。

埼玉郡域には、以上の大形前方後円墳以外に、利根川右岸域を中心に、中小規模の後期前方後円墳が点々と築造されている。

南河原村犬塚に所在した、とやま古墳⁽²⁵⁾は土採取工事により発見された全長69mの前方後円墳であった。すでに墳丘の大部分が削平され、主体部は不明であったが、円筒埴輪列の発見があり、その特徴から6世紀初頭頃の築造と推定されている。

行田市酒巻に所在する酒巻1号墳⁽²⁶⁾は、水田下から発見された、全長50mの前方後円墳で、墳丘は相当破壊されていたが、埴輪列が残されていた。後円部からは、胴張を有する安山岩積の横穴式石室が2基並んで発見され、一号石室からは鉄鏃、刀子、二号石室からは直刀、刀子、鉄鏃、耳環、須恵器等が出土している。

二号石室出土の須恵器（フラスコ形長頸壺、平瓶）は、7世紀中葉頃の所産と考えられたが、追葬時のものである可能性が強く、古墳築造の年代を直接示すとは考え難い。むしろ、埴輪を樹立する状況から、7世紀初頭頃までには築造されていたものと推定しておきたい。

羽生市村君の永明寺古墳⁽²⁷⁾は、利根川の自然堤防上に位置する全長78mの前方後円墳である。後円部頂に河原石と緑泥片岩の竪穴系の石室が存在していたといわれ、昭和6年に遺物が出土した。その内容は、直刀、刀子、鉄鏃、環状鏡板付轡、金銅雲珠、挂甲小札、横矧板鋌留衝角付冑、耳環、鋸等であり、これらの遺物から、古墳の築造時期は6世紀前半代と考えられる。

この他の後期前方後円墳としては、先述の小見真観寺古墳⁽²⁸⁾北方の虚空蔵山古墳⁽²⁹⁾が、出土した埴輪片から6世紀後半代、全長63mの羽生市毘沙門山古墳⁽³⁰⁾も埴輪片の出土から6世紀代とみられている。

3 児玉郡域の後期前方後円墳

県北西部の児玉郡域は、古代の行政区画の児玉、加美、那珂、3郡を含む地域である。利根川に流入する小山川及びその支流域で、北方を神流川と利根川で毛野地域と接している。

古墳時代前・中期を通じて、当該地域の有力首長たちが採用したのは、前方後方墳や、やや大形の円墳と考えられている。約25基知られている前方後円墳の多くは、後期の築造と推定されているものの、実体の明らかなものはさほど多くない。

児玉町生野の生野山丘陵上に所在する生野山16号墳⁽³⁰⁾は、主体部まで判明している数少ない後期前方後円墳である。

全長52m、主体部は河原石積の片袖式横穴式石室で、盗掘で石室内からの出土遺物はなかったものの、石室の形態や石室前庭部出土の土師器から6世紀中葉から後半にかけての築造とみられ

ている。

神川町の神流川右岸段丘上に所存する諏訪山古墳⁽³¹⁾は、変形が著しいが、全長42m、前方部をほぼ南に向ける前方後円墳である。昭和10年頃、地元住民により横穴式石室が発掘されている。この石室は、後円部西側にあり、河原石積の片袖式のもので、直刀や馬具片、勾玉、切子玉、須恵器等が出土したといわれ、上述の生野山16号墳と相前後する築造時期が考えられる。

この他では、生野山16号墳と同一古墳群中の、児玉町生野山銚子塚古墳⁽³²⁾（全長58m）が竪穴式の石室を有し、6世紀前半代の可能性がある。児玉町長沖十兵衛塚古墳（全長37m）や美里町大町兩子塚古墳（全長28m）、同じく美里町大仏二子塚古墳（全長43m）、神川町白岩銚子塚古墳（全長46m）は、いずれも横穴式石室を主体部とする前方後円墳で、6世紀中葉から後半段階の可能性が強い。

4 大里郡域の後期前方後円墳

大里郡域は、荒川が山地部から平野部に達する流域で、古代行政区画の大里、榛沢、幡羅、男衾、4郡を含む地域である。

古墳時代、前期には、江南町塩古墳群中に前方後方墳が築かれるが、前方後円墳は後期になり築造が開始されている。

荒川右岸の江南町野原古墳⁽³³⁾は、全長約40mの前方後円墳で、東京国立博物館蔵となっている「踊る埴輪」を出土したことで知られている。後円部と前方部に凝灰岩切石の横穴式石室が構築されており、後円部のものは片袖式で、直刀、刀子、鉄鏃が出土しており、前方部石室は胴張を有する片袖式で、直刀、刀子が出土している。墳丘からは人物のほか円筒埴輪も出土しており、6世紀後半代の時期が考えられている。

同じく、荒川右岸の熊谷市伊勢山古墳⁽³⁴⁾も、発掘調査がなされた例である。全長41m、後円部に凝灰岩切石の片袖式横穴式石室を有し、直刀、刀子、鉄鏃、鉄製轡、耳環が出土したほか、墳丘からは埴輪や須恵器片が出土しており、6世紀後半代に位置付けられている。

このほか、発掘調査は実施されていないが荒川右岸地区では、大里村箕輪の、とうかん山古墳⁽³⁵⁾（全長74m）が、6世紀代とみられており、同郡域の前方後円墳としては最大規模である。

前方後円墳ではないが、大里村冓山の甲山古墳⁽³⁶⁾は直径90mの大円墳であり、同郡域では最大規模の古墳である。人物埴輪の出土が伝えられ、今のところ築造時期は6世紀代と考えてよく、当該地域（あるいはむしろ、比企地区）の有力首長墓とみなしてよいだろう。

荒川左岸では、地域的には児玉地区に近くなるが、岡部町に所在する、全長51mの寅稻荷塚古墳⁽³⁷⁾が、角閃石安山岩の石室材や埴輪片から6世紀後葉頃の築造とみられ、同じく岡部町岡の全長45mの御手長山古墳⁽³⁸⁾も埴輪片が採取され、後期の築造とみられている。

また、荒川左岸の河岸段丘上の花園町黒田2号墳⁽³⁹⁾は変形が著しいが、埴輪が出土し、後期の帆立貝式前方後円墳の可能性がある。

5 比企地区の後期前方後円墳

荒川中流右岸の比企地区は、旧横見郡を含む地域である。古墳時代前期に前方後円墳の諏訪山29号墳（東松山市）、中期に帆立貝式前方後円墳の雷電山古墳（東松山市）などが出現しており、前期から、有力首長墓の系譜が辿れる地域である。

野本將軍塚古墳は、全長115mを有し、北武蔵域では、唯一、埼玉郡域以外に所在する大形前方後円墳である。

築造時期については、これまで4世紀に遡るとする甘粕健氏の説⁽⁴⁰⁾、6世紀初頭とする金井塚良一氏の説⁽⁴¹⁾が提出されている。

金井塚氏によれば、墳丘封土中に、五領式ないし和泉式の土師器が含まれ、墳丘下に五領式の土師器を出土する住居跡が確実に存在しており、前期の築造である可能性は低いといえよう。

また、同氏は、後円部墳頂下に礫礫の存在を推定しているが、もしこれが正しいとすれば、野本將軍塚古墳は、古墳時代後期前半段階の築造とみるのが妥当となろう。

東松山市北部、荒川を東方に望む丘陵上の三千塚古墳群では、弁天塚以下、3基の後期前方後円墳が調査されている。

三千塚古墳群は8支群、約250基からなる後期群集墳だが、弁天塚古墳は、そのうちの第3支群の主墳とされる前方後円墳である。主体部は、すでに破壊され明確にし得なかったが、竪穴系と想定されている。築造時期は周堀出土の土師器から、6世紀前半頃と推定されている。

秋葉塚古墳⁽⁴³⁾は、三千塚古墳群の第5支群の主墳と想定される、全長45mの前方後円墳であった。後円部に横穴式石室、前方部に石槨が築かれていたが、盗掘により両施設からの遺物の出土はほとんどなく、横穴式石室から、直刀、鉄鏃等が出土した程度であった。

片袖式の横穴式石室のプランや埴輪を欠くことからすると、6世紀後半代でも、その新しい時期とみてよいであろう。

同じく、三千塚古墳群の第8支群の主墳と考えられる長塚古墳⁽⁴⁴⁾も、全長37mと、小形の前方後円墳であった。秋葉塚古墳同様、後円部に片袖式の横穴式石室、前方部に石槨と、2基の主体部を有していた。主体部からの出土遺物は、盗掘によりほとんどなく、耳環等、少量が出土しただけであったが、墳丘裾からは同埴輪のほか、靱、人物埴輪の破片も出土している。

古墳の築造時期については、横穴式石室のプランや埴輪を有することから、6世紀後半代の時期が考えられる。

東松山市東部の松山台地には、先述の野本將軍塚古墳のほか、柏崎古墳群中に、おくま山古墳、天神山古墳の2基の前方後円墳が所在している。天神山古墳は、⁽⁴⁵⁾ 仿製内行花文鏡や銅釧の出土が伝えられており、墳丘の損壊がひどいが、全長は60m以上とみられるものである。内部主体も不明で、後期の可能性も残る。

一方の、おくま山古墳⁽⁴⁶⁾は、柏崎古墳群のほぼ中央に位置し、全長62mの帆立貝式の前方後円墳と考えられている。

近年、周堀の一部が調査され、円筒及び人物埴輪が出土した。その特徴から、6世紀前葉頃の築造と判明するに至ったが、主体部等については依然不明である。

6 入間地区の後期前方後円墳

荒川中流右岸の入間郡域は、荒川の支流である入間川や越辺川の流域であり、比企郡域の南に接している。

入間郡域では、約15基の前方後円墳が築造されているが、前・中期の確実な例は、今のところ確認されていない。大半は後期の築造と考えられてはいるが、主体部の判明している例は少ない。

入間川左岸の台地上に所在する川越市市場の牛塚古墳⁽⁴⁷⁾は、主体部まで調査の及んだ後期前方後円墳の数少ない例である。全長は42mとやや小形で、前方部を北西に向けている。主体部は後円部南西の胴張を有する河原石積の横穴式石室であり、玄室床面を調整し、複数次の埋葬が行われたといわれている。

石室からの出土品には、直刀、鉄鏃、雲珠、耳環、切子玉、管玉、ガラス玉、金銅製指輪、刀子があり、墳丘からは須恵器（甕、提瓶）、土師器（杯）、埴輪片が出土している。

古墳の築造時期は、墳丘出土の須恵器、土師器から、6世紀末葉頃と考えてよいだろう。

小畔川左岸の川越市西原古墳⁽⁴⁹⁾は、発掘調査で帆立貝式の前方後円墳と判明している。

全長33m、前方部を西に向けており、主体部は耕作で破壊されているが、粘土槨と推定されている。主体部からの出土遺物は皆無であったが、周堀からは朝顔形円筒や人物、馬形などの埴輪や須恵器片の出土があり、これらから古墳の築造時期は6世紀後半代と推定されている。

以上のほか、越辺川右岸の坂戸市には、全長63mの胴山古墳⁽⁵⁰⁾及び全長52mの雷電塚古墳⁽⁵¹⁾の2基の前方後円墳が所在している。胴山古墳は横穴式石室の存在が推定され、雷電塚古墳は主体部は不明だが、埴輪片が出土しており、両者とも後期の築造とみてよいだろう。

また、同じく越辺川右岸の坂戸市善能寺地区から毛呂山町苦林地区にかけて所在する、後期群集墳である善能寺古墳群中に、数基の小形前方後円墳の所在が確認されている。⁽⁵²⁾

7 北足立郡域の後期前方後円墳

荒川中、下流左岸の元荒川との中間地区及び、荒川下流の右岸地区（旧新座郡域）の北足立郡域には、前期に前方後円墳の高稲荷古墳（川口市峯）や、円墳の熊野神社古墳（桶川市川田谷）が築かれているが、その後、前方後円墳の築造はあまり活発でなく、後期のものの調査例もごくわずかである。

桶川市川田谷の荒川左岸台地上には、後期古墳群の川田谷古墳群が築かれている。その中の、ひさご塚古墳⁽⁵³⁾は、北足立郡域では、主体部まで調査された前方後円墳の唯一の例である。

全長41m、やや短小な前方部を北に向けている。墳丘はほとんど失われており、主体部は後円部西側に凝灰岩切石の無袖式横穴式石室が築かれていたが、盗掘でほとんど破壊されていた。

出土遺物としては、主体部から、直刀、鉄鏃、刀子、馬具破片、墳丘から人物、円筒埴輪、須恵器片があり、これからすると、古墳の築造時期は、6世紀後葉とみられる。

このほか、後期とみてほぼ誤りない前方後円墳が何基がある。

吹上町三嶋神社古墳⁽⁵⁴⁾は、神社社殿などで墳丘が変形しているが、全長約50m、前方部を西に向ける前方後円墳である。江戸時代に成立した『新編武蔵風土記稿』には、横穴式石室と思われる「石槨」の記載があり、現に、社殿の傍らや参道の敷石に、その石材と思われる緑泥片岩が残されている。遺物では、玉や刀の出土伝承があり、墳丘からは埴輪片が採取できる。古墳の築造時期としては、6世紀後半代が想定される。

また、同じく荒川左岸の台地上の鴻巣市馬室古墳群中の將軍塚古墳⁽⁵⁵⁾は、前方後円墳とされるが、実体はほとんど不明である。採取される埴輪片からすれば、これも6世紀後半代と考えられる。

8 後期前方後円墳の築造にみる首長層の動向

北武蔵域の後期大形前方後円墳は、5世紀後葉の稲荷山古墳を嚆矢に、6世紀前葉頃の野本將軍塚古墳、6世紀前半の二子山古墳と、約半世紀の間に、3基が築造されている。

これら3古墳は、各々の築造時期において、北武蔵域最大規模の前方後円墳であり、当該地域の最高首長墓の系譜として考えることが可能であろう。しかし、見落としてはならないのが、埼玉古墳群中の大円墳、丸墓山古墳である。丸墓山古墳の築造時期は、稲荷山古墳に後出し、野本將軍塚古墳と前後する時期が考えられる。そして、墳丘規模は、大形前方後円墳と比較しても遜色なく、土量的にはむしろ凌駕しており、その被葬者は、政治的にも、ほぼ同等の権勢を有していたものと判断される。すなわち、埼玉郡域に強力な首長権が成立した後、比企郡域にも、これに匹敵する有力な勢力の台頭が一時的にあったが、埼玉郡域の勢力も引き続き強力な首長権を保持していたと想定され、北武蔵域の最高首長権が、実質的に埼玉古墳群の最高首長間で継承されていったものとみなすこともできる。

古墳時代、前・中期に大形古墳のみられない北武蔵において、埼玉古墳群の大形前方後円墳の出現は、やや唐突の観がある。やはり、その背景には、畿内政権の関与を想定してよいだろう。前代に、太田天神山古墳などの大古墳を築き、東国の脅威となっていた北方の毛野の豪族層の動向を踏まえた場合、当時の北武蔵が、畿内政権の東国経営にとって極めて重要な地域となっていたにちがいない。おそらく、在地勢力による力のバランスを巧みに利用して、東国の政治支配を強めようとした畿内政権の意向のもと、急速に力を得た埼玉郡域の氏族集団が出現させたのが埼玉古墳群であり、稲荷山古墳や二子山古墳などの大形前方後円墳は、その頂点に立った首長の墳墓として理解が可能である。

6世紀後半段階でも、埼玉古墳群内では、鉄砲山、將軍山古墳などの大形前方後円墳が築造されており、同古墳群の最高首長の北武蔵域での優位性は保たれている。だが、この時期に至り、同じ埼玉郡域に100m級の大形前方後円墳である高山古墳や天王山古墳などが出現した。これらの前方後円墳は、墳丘規模において、埼玉古墳群の大形前方後円墳にはほぼ匹敵するものであり、それまでの、北武蔵域での埼玉古墳群の最高首長の突出的な権力体制が変化したことを示している。

しかし、同じ郡域内で、地理的に埼玉古墳群と近接することから、これらの大形前方後円墳の被葬者と埼玉古墳群の最高首長とが対立的な関係にあったとは考え難い。おそらく、彼らは近親的な関係にあり、埼玉古墳群の大首長と連合的な政治体制を具現させていた有力首長であったものと考えられる。

埼玉古墳群内では、將軍山古墳を最後に、大形前方後円墳の築造は停止された。北武蔵域の最高首長権は、その後、北方の小見真観寺古墳の被葬者に継承されたものと思われるが、北武蔵での大形前方後円墳の築造は、同古墳を最後にみられなくなった。

畿内では、すでに6世紀後半段階で、前方後円墳が築かれなくなっており、新たな身分秩序の編成と係わり、首長間における旧来からの前方後円墳の構築という擬制的同族関係の表象が、不要となったための現象とみられている。北武蔵における前方後円墳の築造の停止も、そうした政治的変革が背後にあるものと考えられ、これが畿内から波及したための現象と理解してよいだろう。

大形前方後円墳が、後の国域を統括した可能性のある首長墓であるのに対し、中小規模の後期前方後円墳については、最大でも、後の郡単位程度の地域の首長墓であろう。基本的には、埼玉古墳群の大首長との関係下に、前方後円墳を築いたものと理解してよいと思うが、それらについては、時期比定の手掛かりの乏しいものも多く、系譜関係の考定は、やや困難なのが現状である。

中小の前方後円墳の終末時期については、各地域で、それほど大きな時間差があるようには思われない。埼玉古墳群内では、中の山古墳が6世紀末～7世紀初頭頃の築造とみられ、すでに伝統的な埴輪施設は失われているものと推定された⁽⁵⁶⁾。

入間地区でも、牛塚古墳が6世紀末葉頃、北足立郡域のひさご塚古墳も6世紀後葉の築造であり、比企、児玉郡域などでも、7世紀代に大幅に下しうる前方後円墳を見い出せない。おそらく、中小の前方後円墳も、7世紀初頭段階までには築造が停止されたものと考えてよいだろう。

2. 前方後円墳終末後の有力古墳

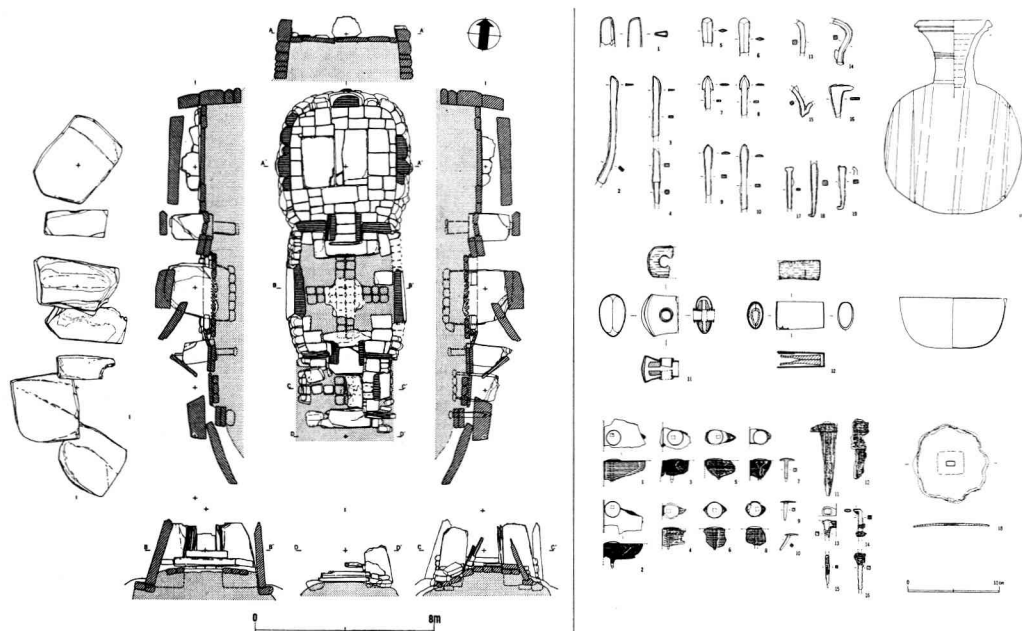
北武蔵域の前方後円墳は、7世紀初頭頃までに築造が停止されるに至った。

しかし、これと前後して、比較的大規模な墳丘や石室を有する円墳や方墳が各域で点々と出現している。「大規模」とはいても、前代の大形前方後円墳に及ぶべくもないが、依然として築造の続いている群集墳中の小形円墳とは、隔絶したものがあり、前方後円墳廃止以後の有力首長層の古墳と考えてよいだろう。

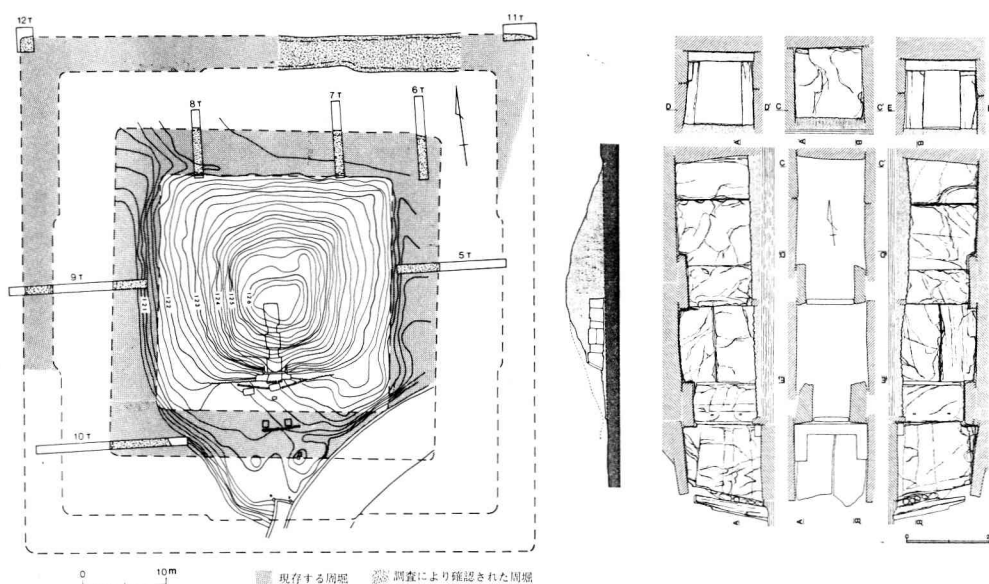
前代に興隆を極めた埼玉古墳群内では、白山古墳⁽⁵⁷⁾が、その候補にあげられる。

稻荷山古墳北方約500mに位置し、直径約50mの円墳で、墳丘に、横穴式石室の奥壁である緑泥片岩が露出しており、壁材の角閃石安山岩も散乱している。

將軍山古墳以降、同古墳群内の最高首長層の古墳と考えられ、7世紀前半代の築造時期が推定



第10図 八幡山古墳横穴式石室及び出土遺物〔註(58)より転載〕



第11図 穴八幡古墳及び横穴式石室〔註(66)より転載〕

できる。

埼玉古墳群の周辺では、行田市八幡山古墳⁽⁵⁸⁾が、巨石を用いた横穴式石室で著名である。墳丘が失われ、石室が崩壊していたが、復原修理を機に発掘調査が実施されている。調査の結果、墳形は直径74mの円墳と推定され、石室は秩父産の緑泥片岩と群馬産の角閃石安山岩を用いた、三室構造の胴張を有した主軸長約14mの巨大な横穴式石室と判明した。出土遺物には、銅鏡、金銅棺

座金具、直刀、方頭大刀柄頭、金銅鞘尻金具、銀製弓弭金具、鉄鏃、塗漆木棺片、釘、須恵器、等があり、大半は中室の攪乱、埋没土中から出土した。これらの出土遺物の年代は、7世紀中葉から後半代にかけてと考えられ、古墳の築造時期は、7世紀中葉頃におさえられよう。

八幡山古墳の被葬者は⁽⁵⁹⁾、墳丘や石室、また副葬品の卓越性から、真観寺古墳以降の北武蔵の最高首長と考えてよいだろう。

また、塗漆木棺の出土例だが、現在のところ、畿内の有力者層の古墳に限られており、畿内以外では、わずかに八幡山古墳のみであり、注目されるところである。

八幡山古墳の北方約500mには、一辺約28mの方墳と考えられる、地藏塚古墳⁽⁶⁰⁾が所在している。角閃石安山岩の切石と、緑泥片岩を利用した胴張を有する横穴式石室を主体部としており、線刻壁画⁽⁶¹⁾を有することでも著名である。出土遺物が皆無の状況で年代考定が困難だが、石室材の用い方から、上述の八幡山古墳以降の時期、7世紀後半代の時期を考えておきたい。

熊谷市中条大塚古墳⁽⁶²⁾も、角閃石安山岩と緑泥片岩を利用した胴張を有する横穴式石室を主体部とし、現存する墳丘は、一辺約26mの方墳状にみえる。石室からは直刀、鉄鏃、金銅鞘尻金具、小札、塗漆木片、勾玉、金箔等が出土しており、7世紀前半代と考えられる。

埼玉地区とは、荒川を挟んだ対岸の比企地区では、前方後円墳の築造停止と前後する時期に、直径37mの冑塚古墳⁽⁶³⁾（東松山市）や、直径30mの若宮八幡古墳⁽⁶⁴⁾（東松山市）、直径28mのかぶと塚古墳⁽⁶⁵⁾（吉見町）など、胴張を有する横穴式石室を主体部とする、同地域としてはやや大形の円墳がすでに出現している状況があった。

また、比企地区としては、やや西に奥まった山あいの地に穴八幡古墳⁽⁶⁶⁾（小川町）がある。従来、円墳とされてきたが、近年の調査により、二重の周堀を有する、一辺約31mの二段築成の方墳と判明した。主体部は、緑泥片岩の大形の切石を用いた複室構造の横穴式石室で、主軸長は8.2mを測る。石室は、江戸時代にすでに開口していたといわれ、玉類の出土が伝えられているが、古墳と直接係わりのある遺物は現存していない。古墳築造期の考定は、困難といわざるを得ないが、大形の石材を用いた切石造の横穴式石室から、7世紀中葉から後半代にかけての時期を推定しておきたい。

上総、下総、あるいは上野西半部地域など、当時の東国域には、前方後円墳廃絶以後、その後継首長墳として、整美な切石積の横穴式石室を持つ方墳が築かれている地域があるが、武蔵域でも、ほぼ同様な現象が認められるのである。これは、畿内域での有力首長墓が、前方後円墳から比較的大規模な円墳や方墳、八角形墳などに移行しているの⁽⁶⁷⁾と対応する動きといえよう。⁽⁶⁸⁾

3. 群集墳の築造と古墳の終焉

後期の小規模古墳や横穴墓が一定区域に集中して築造される現象は、北武蔵域でも広く認められる。

以下、その築造状況について述べることにする。

1 埼玉郡域の群集墳

埼玉郡域は、後期大形前方後円墳が集中的に築かれた、埼玉古墳群の所在する地域である。

「群集墳」と呼ぶには、あまりにも異質な埼玉古墳群を除外すれば、行田市酒巻古墳群、加須市樋遣川古墳群、春日部市塚内古墳群、蓮田市十三塚古墳群など、いずれも小規模なものが知られているにすぎない⁽⁶⁹⁾。こうした現象は、古墳築造の労働力の多くが埼玉古墳群などの大形古墳の築造に投入された結果かも知れない。

酒巻古墳群⁽⁷⁰⁾は利根川右岸の自然堤防上に立地し、現在23基の所在が確認されている。利根川の氾濫土による埋没が考えられ、多くが偶発的に水田面下から発見、調査されたものである。東方の行田市斉条地区でも何基かの古墳が知られ、南河原村の、とやま古墳なども距離的に至近で、あるいは同一の古墳群と把握できるかもしれない。相当数の古墳の所在の予想される古墳群である。

23基中、1号墳が前方後円墳であり（内容については、すでに触れたとおりである）、8号・15号墳も前方後円墳と考えられている。その他の古墳は、小形の円墳である。

主体部は、木棺直葬及び小形礫槨（10号墳）、河原石積の横穴式石室（8号墳）や角閃石安山岩を用いた横穴式石室など、築造時差によると思われる多様性をみせている。断片的な出土遺物しかないが、6世紀前半代と考えられる10号墳や、追葬時の副葬品の7世紀中葉頃の須恵器を出土した1号墳などの例から、古墳群の形成も、6世紀から7世紀中葉頃まで及んだものと推定される。また、最近の調査で、直径42mの円墳と判明した1号墳から、蛇行状鉄器を装着した状況の馬をはじめとした多量の埴輪が出土し、注目されている。

春日部市塚内古墳群⁽⁷¹⁾は、古利根川を東に遠望する台地上に、13基の低墳丘の円墳が現存しており、このうちの4号墳が調査されている。

4号墳は直径約20mの円墳で、木炭槨1基、粘土槨3基、合計4基の主体部を有し、直刀、鉄鏃、ガラス玉、埴輪（人物、円筒）、TK23ないし、TK47に比定可能な須恵器が出土しており、5世紀末葉頃の築造と考えられる。

このほか、塚内古墳群では、横穴式石室材の角閃石安山岩の散乱するものもあり、古墳群築造の下限は7世紀前半代と推定される。

樋遣川古墳群⁽⁷²⁾は、数基が現存するが、実体はほとんど明らかでなく、かつて6世紀代と思われる馬具や直刀、ガラス玉などを出土した古墳があったらしいが、現存していない。

十三塚古墳群⁽⁷³⁾も、7世紀代の横穴式石室を有する円墳が調査されたことがあったが、現存する古墳は皆無に近い状況である。

2 児玉郡域の群集墳

上毛野に接する児玉郡域は、比較的大規模な群集墳が築かれている地域である。

本庄市塚本山古墳群⁽⁷⁴⁾は、小山川左岸の大久保山と呼ばれる独立丘陵上に築かれており、少なく

とも170基以上からなる大規模な群集墳である。

群中に前方後円墳を含まず、円墳のみの構成で、7割方は直径10m未満の小円墳である。なかには、ほとんど墳丘を持たず、横穴式石室が単独で存在するが如きものもある。

塚本山古墳群の一部、30基ほどが、関越自動車道建設の際に調査され、内容が明らかになっている。それらは、いずれも河原石積による胴張式横穴式石室を主体部にしていて、1号・15号の両墳は、埴輪を有し、6世紀末葉頃の築造時期が考えられ、古墳群中では比較的早い時期のものと考えられる。その他については、ほぼ7世紀代を通じての造墓活動の結果とみることができるが、とりわけ、7号墳や29号墳などは、出土する土器などから、7世紀末ないし8世紀初頭頃まで下して差支えないものと思われる。

一部の調査成果しかないが、塚本山古墳群は、6世紀末葉に築造が開始され、ほぼ7世紀いっぱい築造が継続されたものと判断される。

児玉町の長沖古墳群⁽⁷⁵⁾は、小山川左岸の丘陵上に立地し、その分布範囲は南北500m、東西1500mに及んでいる。現在160基の所在が確認されており、そのうち4基は前方後円墳で、残りはほとんどが円墳である。

これまで、19基が発掘調査され、内容が明らかとなっている。

25号墳は墳丘がすでに失われた前方後円墳で、周堀の部分的な調査に終わったが、全長約40m、出土した土器から、6世紀前葉頃の築造と推定された。

円墳では、B種ヨコハケを有する円筒埴輪片から、5世紀後葉頃と考えられる14号墳（主体部不明。周堀の一部調査）や、周堀出土のⅠ期末の須恵器高杯や古式な鬼高式の土師器杯から6世紀初頭頃と推定される2号墳が古い時期に属する。

その後の6世紀代の円墳としては、礫櫛の一部が遺存していた1号墳がその古い段階に、河原石を用いた無袖式の、当郡域では初現的な横穴式石室を主体部とする28号墳が中葉段階に、そして、河原石積の両袖式横穴式石室を主体部とする造出付円墳の8号墳が、末葉段階に築かれている。

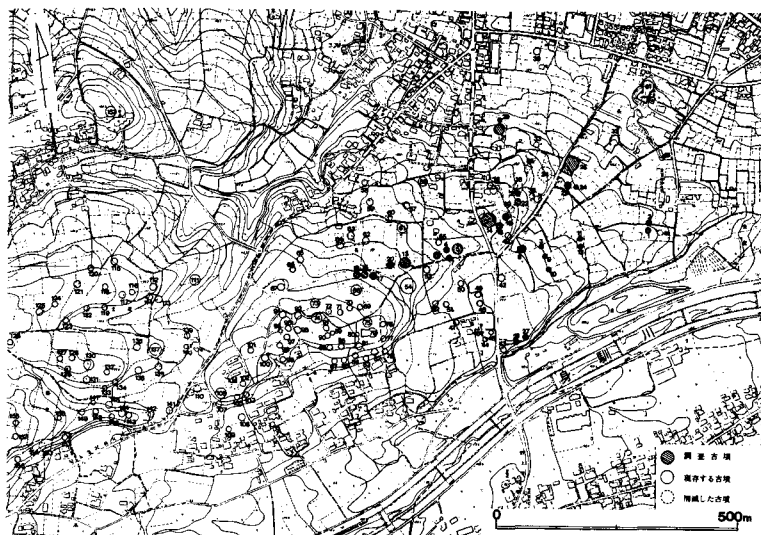
さらに、7世紀代と考えられる古墳は、いずれも直径15m未満で、河原石積、両袖式の横穴式石室を主体部としており、3・9・10・11号墳などが、これに該当する。中でも、11号墳は、出土土器片から、7世紀末頃まで下降する時期が考えられている。7世紀代と考えられる、これらの古墳は、いずれも埴輪を欠き、6世紀代のものが、ほとんど埴輪を有するのと対象的である。

以上の調査例から推定するならば、長沖古墳群は5世紀末葉段階で築造が開始され、その後、6・7世紀代を通じて形成されていった古墳群と考えられる。

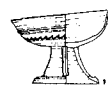
神川町の青柳古墳群⁽⁷⁶⁾は、武蔵、上毛野の境界を流れる神流川右岸の段丘沿いに、約2kmにわたり分布する群集墳である。旧青柳村に所在していたことから「青柳」の名称があるが、城戸野、海老ヶ久保、十二ヶ谷戸、二の宮、南塚原、北塚原の各支群にグルーピングが可能である。6支群の古墳の総計は164基、北塚原、南塚原の各支群内に1基ずつの小形の前方後円墳が含まれる

表2 北武蔵の主要古墳群，横穴墓群

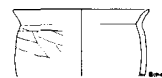
No.	古墳群名	所在地	No.	古墳群名	所在地
1	埼玉古墳群	行田市埼玉・長野・渡柳	26	善能寺古墳群	坂戸市善能寺字塚原
2	酒巻古墳群	行田市北河原字酒巻	27	石井古墳群	坂戸市石井・片柳新田
3	樋遣川古墳群	加須市上樋遣川	28	下小坂古墳群	川越市下小坂
4	塚内古墳群	春日部市内枚	29	南大塚古墳群	川越市豊田本字西中原
5	十三塚古墳群	蓮田市閤戸	30	箕田古墳群	鴻巣市箕田
6	目沼古墳群	杉戸町目沼	31	生出塚古墳群	鴻巣市東
7	青柳古墳群	神川町新宿・池田・新里ほか	32	馬室古墳群	鴻巣市原馬室
8	旭・小島古墳群	上里町七本木・神保原・本庄市小島・下野堂	33	川田谷古墳群	桶川市川田谷字西台・前原・若宮
9	塚合古墳群	本庄市東台・日ノ出	34	側ヶ谷戸古墳群	大宮市三橋四丁目
10	長沖古墳群	児玉町高柳字原・児玉字賀家上	35	大久保古墳群	浦和市塚本・白鯨・上大久保
11	生野山古墳群	児玉町児玉字生野山・美里町北十条			
12	塚本山古墳群	美里町下児玉・字西山	No.	横穴墓群名	所在地
13	広木大町古墳群	美里町広木字大町・後山王・魂洲	A	吹上横穴墓	和光市吹上
14	大塚古墳群	皆野町・国神字上の平	B	滝之城横穴墓	所沢市柳瀬字城
15	飯塚・招木古墳群	秩父市寺尾・尾田蒔	C	北秋津横穴墓	所沢市北秋津字阿間巖
16	大野原古墳群	秩父市大野原	D	川崎横穴墓	上福岡市福岡字沼上
17	小前田古墳群	花園町小前田・寄居町中小前田	E	山下横穴墓	川越市岸町
18	黒田古墳群	花園町黒田	F	吉見百穴横穴墓	吉見町北吉見字六の耕地
19	三ヶ尻古墳群	熊谷市三ヶ尻	G	黒岩横穴墓	吉見町黒岩字大座谷・百穴・首切・地獄谷・茶臼山
20	鹿島古墳群	川本町鹿島・台・平方裏	H	十郎横穴墓	鳩山町赤沼字重郎
21	中条古墳群	熊谷市中条	I	鳥木横穴墓	鳩山町須江字鳥木
22	三千塚古墳群	東松山市大谷字花の木・雷原・長坂	J	熊瀬ヶ沢横穴墓	鳩山町熊井字熊瀬ヶ沢
23	月輪古墳群	滑川町月輪	K	比丘尼山横穴墓	東松山市大谷字花の木
24	柏崎・古凍古墳群	東松山市柏崎・古凍	L	天神山横穴墓	滑川町山田
25	諏訪山古墳群	東松山西本宿字後通	M	尾根横穴墓	嵐山町古里字尾根



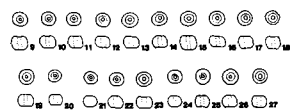
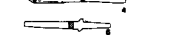
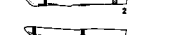
長沖古墳群分布図



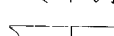
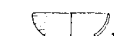
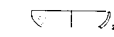
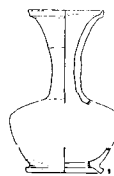
2号墳出土遺物



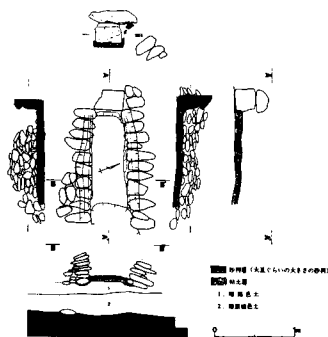
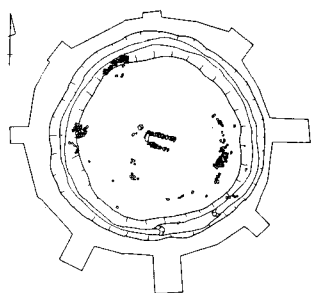
12号墳出土遺物



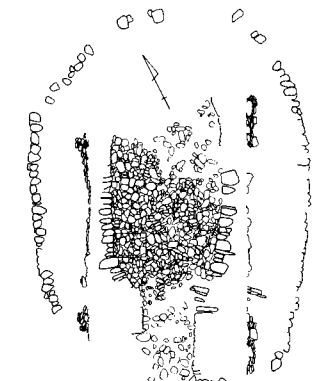
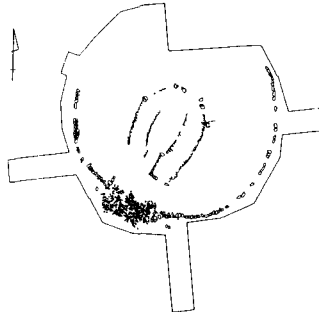
10cm



11号墳出土遺物



12号墳



11号墳

第13図 長沖古墳群の分布（左上）と出現期の石室（左下）及び出土遺物（右上）消滅期の石室（下中）及び出土遺物（右下）

〔註(76)の文献より転載〕

が、その他は、直径10～20m規模の小形円墳が大多数である。

用水路や工場建設による記録保存のため、一部が発掘調査され、その内容が明らかになっているが、最も古く遡りそうなのが南塚原3号墳である。

南塚原3号墳は、調査時すでに墳丘が失われていたが、周堀からすると、直径21mで、東側周堀にはブリッジを有するらしい。古墳の中央から礫群が検出されたことから、主体部は礫櫛の可能性が強く、周堀内出土の土師器甕から6世紀初頭前後の時期が考えられる。

これ以後の古墳としては、河原石積の無袖式横穴式石室を有する北塚原7号墳が6世紀前半代に、そして6世紀後半代には、やはり河原石積の無袖式横穴式石室を主体部とする、十二ヶ谷戸3号墳などが築かれている。

そして南塚原5・6・7号墳などの、河原石積の胴張式横穴式石室を有する古墳は、埴輪も樹立せず、7世紀代に下降することは確実であろう。

断片的な調査例からの推定だが、青柳古墳群は、6世紀初頭前後に築造が開始され、7世紀前半代にかけて形成された古墳群と考えられる。

このほか、児玉郡域では、児玉町生野山古墳群⁽⁷⁷⁾（前方後円墳を含み、100基以上）、美里町広木大町古墳群⁽⁷⁸⁾（前方後円墳を含み、80基以上）、本庄市塚合古墳群⁽⁷⁹⁾（60基以上）、同市旭・小島古墳群⁽⁸⁰⁾（40基以上）などが群集墳として知られている。

生野山、旭・小島両古墳群は、その下限は7世紀に及ぶが、前代の周溝墓が同一地区に所在しており、5世紀中葉に遡る可能性のある古墳もあって、それらの連続性について注目される古墳群である。広木・大町古墳群は6世紀前半から7世紀代、塚合古墳群は6世紀末から7世紀代を通じて、形成されたものと推定される。

3 秩父郡域の群集墳

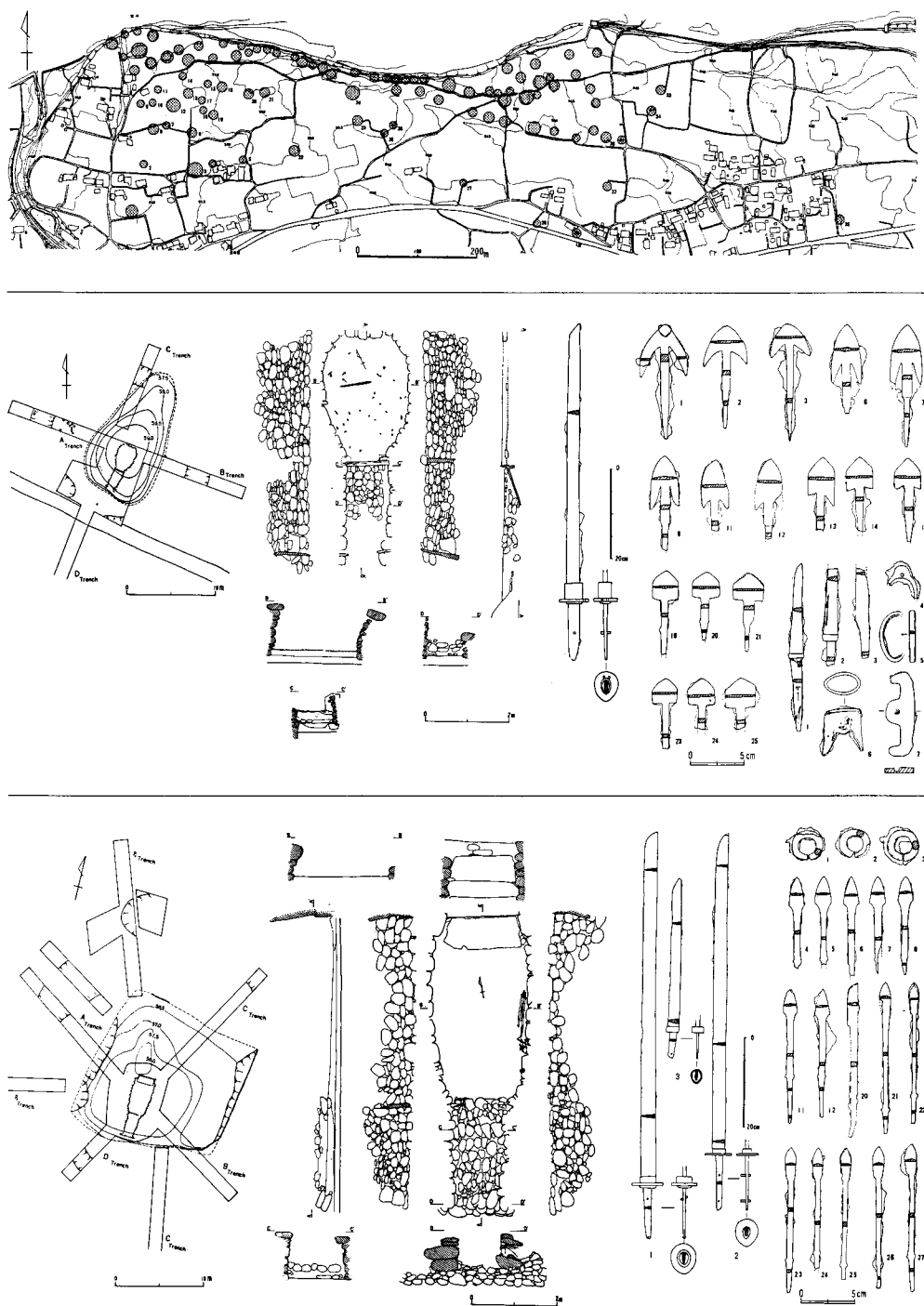
秩父郡域には、現在までのところ、中期以前の古墳は確認されていない。古墳といえば大かたは後期群集墳中のものである。

秩父市寺尾の荒川左岸の河岸段丘上には、長さ1km以上にわたり、飯塚・招木古墳群⁽⁸¹⁾（立地が飯塚、招木両小字の地区にわたるので、この名称がある）が築かれている。総数124基と、秩父郡域最大規模の群集墳である。

この124基は全て円墳で、直径は20m以下のものがほとんどであり、前方後円墳は含まない。これまで、道路建設により数基が調査されたが、いずれも河原石や片岩系の割石による胴張式横穴式石室を主体部としていた。

出土遺物が乏しく、この面からの年代考定は困難だが、胴張式横穴式石室を主体部とする点や埴輪を持つ古墳が確認できない状況から、7世紀初頭前後に築造が開始され、ほぼ7世紀代を通じて構築が継続された古墳群と推定される。

秩父郡域では、このほか、秩父市の横瀬川左岸段丘上の大野原古墳群や、皆野町の荒川左岸段丘上の金崎古墳群⁽⁸²⁾が、後期群集墳として知られている。両古墳群とも小円墳を主体とするが、前



第14図 鹿島古墳群の分布(上)と石室出土遺物の代表例
(中：1号墳，下：24号墳)〔註(86)の文献より転載〕

者は総数、数十基といわれ、胴張式横穴式石室を有する古墳や、蕨手刀を出土したといわれるもの⁽⁸⁴⁾もあり、7世紀代から一部8世紀にかかる可能性がある。

後者は、現在4基しか遺存しないが、隣接する長瀬町上長瀬古墳群⁽⁸⁵⁾と一体と思われ、横穴式石室の形態から、6世紀中葉から7世紀後半代にまたがる築造時期が推定できる。

4 大里郡域の群集墳

大里郡域では、荒川兩岸の段丘部分を中心に、群集墳が出現している。

川本町鹿島地区から江南町押切にかけての、荒川右岸の河岸段丘上には、東西約2kmにわたり、鹿島古墳群⁽⁸⁶⁾が分布している。

前方後円墳を含まず円墳のみの構成で、3支群100基が確認されているが、荒川の浸蝕により流失したものも相当数にのぼるものと考えられている。

は場整備に際し、23基が記録保存のため調査されているが、墳丘規模は、大かたが直径20mに満たないものであり、主体部は全て、片岩と河原石積の胴張式横穴式石室であった。出土遺物としては、直刀、刀子、鉄鏃、耳環などがあるが、大部分が盗掘されており、貧弱な内容である。

築造の開始時期は、1号墳が埴輪を出土することから6世紀末葉頃、終末については、34号墳の墳丘下から発見された住居が7世紀末葉頃と考えられるものであることから、8世紀初頭頃に及んだものと推定される。

鹿島古墳群より8kmほど上流の荒川左岸、寄居町中小前田から花園町小前田にかけて立地している小前田古墳群も、規模の大きな群集墳である。円墳のみの構成で、かつては100基以上が確認できたといわれるが、最近はほとんど見る影もなくなっている。

これまで、昭和28・29年に東京大学が3基の円墳を発掘し、河原石積の胴張式横穴式石室を検出、直刀、玉類、埴輪などが出土したほか、昭和31年には立教大学が3基の円墳⁽⁸⁷⁾を⁽⁸⁸⁾発掘、やはり河原石積の胴張式横穴式石室を検出、直刀、鉄鏃、刀子、玉類、耳環、須恵器などが出土している。近年の調査例では、昭和53年に国道建設に伴う県教育委員会の調査で、古墳18基、埴輪円筒棺1基、箱式石棺5基が発掘されている。墳形はいずれも円墳で、造出付きの2号墳は直径25mとやや大きい⁽⁸⁹⁾が、大かたの直径は20mに満たないものであり、4号墳のように墳丘をほとんど持たず、石室のみで存在したかと思われるものもあった。遺物としては銅釧、鉄鏃、玉類、土師器、埴輪などがあった。

以上の調査例からすると、古墳群の築造開始は6世紀初頭頃、終末については、埴輪を持たない胴張式横穴式石室などから、7世紀中葉頃と推定できる。

大里郡域ではこのほか、熊谷市三ヶ尻古墳群⁽⁹⁰⁾（少なくとも78基以上）が、6世紀後半から7世紀にかけての古墳群と考えられるほか、同市の中条古墳群⁽⁹¹⁾（総数不明）は、部分的な調査ではあるが、5世紀末葉から7世紀前半代にかけての古墳群と推定されている。

また、花園町黒田古墳群⁽⁹²⁾は総数30基余りと小規模で、うち10数基が調査され、河原石積の横穴式石室を主体部とするものが確認されている。出土遺物には、直刀、馬具、玉類、須恵器、埴輪

などがあり、6世紀前代から7世紀前半にかけての古墳群と判明している。

5 比企郡域の群集墳

荒川中流右岸の比企地区には、東松山市及び周辺の、所謂比企丘陵上を中心に多数の後期古墳群が築かれている。

この比企丘陵の北東部、東松山市大谷に所在する三千塚古墳群⁽⁹³⁾は、前方後円墳4基を含み、8つの支群で構成される総数200基を超える大群集墳である。これまでに、ゴルフ場建設で約30基ほどが調査されている。

前方後円墳は、雷電山、秋葉塚、弁天塚、長塚古墳で、すでにその内容は第1章で触れたとおりで、雷電山古墳は5世紀前半代と考えられ、後期群集墳としては除外すべきだろう。前方後円墳以外は第7支群の4号墳(方墳)を除けば、全て円墳で、第7支群の25号墳の、直径30mを最大とし、多くは直径20m以下の小円墳である。主体部については、12基が横穴式石室を持つほか、13基が石槨を持っており、特徴的といえる。盗掘のため、全般に出土遺物は少ないが、直刀、鉄鏃、耳環、玉類、土師器、須恵器、埴輪など、6世紀中葉頃から7世紀後半代にかかるものが認められ、古墳群自体についても、ほぼ同様な期間に形成されたものと推定してよいだろう。

荒川の支流である都幾川右岸の高坂台地上にある、東松山市諏訪山古墳群⁽⁹⁴⁾は、現在40基ほどが確認できるが、かつてはかなりの数の古墳が存在していたといわれる。

後期群集墳として理解が可能なのは、いずれも円墳で、B種ヨコハケメを有する円筒埴輪を出土した33号墳⁽⁹⁵⁾や2基の粘土槨を主体部とした1号墳などから、5世紀後葉段階で築造が開始されたものと考えられる。その後、6世紀代には、横穴式石室を有するものが築かれているが、その中には、ゆるい胴張を有するものがあり、少なくとも6世紀末葉頃までは継続して構築が行われたことが明らかである。

なお、諏訪山古墳群中には、古式古墳である前方後方墳である29号墳、前方部が低平で古式な様相の前方後円墳、諏訪山古墳(35号墳)などがあるが、これらは、後期群集墳からは当然除外して考えるべきである。

荒川支流の市の川右岸台地上に築かれた、滑川町月輪古墳群は約50基ほどが確認され、このうち10基が東京大学及び埼玉県教育委員会により、発掘調査されている。墳形は、2基が造出付の円墳と想定されているが、他は円墳である。⁽⁹⁶⁾

最も古く遡るのは、屋田1号墳と呼ばれる直径24mの円墳で、木棺直葬の主体部と思われる部分から、剣、管玉が、周堀からは和泉式期の土師器や須恵器片が出土している。そして、埴輪棺を有するものや、横穴式石室を有するものが、ほぼ7世紀初頭頃まで継続して構築されたものと推定される。

このほか、比企郡域には、多数の小規模群集墳が存在するが、その多くは7世紀代に形成されたものと考えられている。

6 入間郡域の群集墳

荒川の支流である入間川流域の入間地区には、大規模な古墳群はあまり多くない。

比企郡との境を流れる越辺川の南の毛呂山町苦林から坂戸市善能寺地区にかけての台地上には、少なくとも60基以上からなる善能寺古墳群⁽⁹⁷⁾が築かれている。前方後円墳5基（推定を含む）のほかは、小規模な円墳の構成で、数支群に分かれて分布している。

入石塚古墳は前方後円墳の可能性があり、剣、直刀、甲冑、鉄鏃、玉類、仿製鏡、埴輪が出土し、6世紀前葉頃の時期が考えられる。その他、横穴式石室を有し、直刀や鉄鏃、須恵器を出土し、7世紀後半代と考えられる大河原2号墳、あるいは、周溝が調査され円筒埴輪や須恵器の出土で、6世紀後半代と思われる北峰5・15号墳などが調査されている。

こうした状況から、善能寺古墳群は、6世紀前葉頃から7世紀後半にかけて形成された古墳群といえる。

同じく、越辺川を北方に望む、坂戸市石井地区には、総数50基以上の石井古墳群が所在している。全長63mの前方後円墳、胴山古墳のほかは、いずれも小規模な円墳である。これまで、胴張式横穴式石室を持つ新町古墳⁽⁹⁸⁾や坂戸56・68号墳⁽⁹⁹⁾などの調査例があり、直刀、鉄鏃、耳環、玉類などが出土し、7世紀代の古墳の一端が明らかとなっている。

入間郡域ではこのほか、川越市に下小坂古墳群⁽¹⁰⁰⁾、南大塚古墳群⁽¹⁰¹⁾などの後期古墳群がある。両古墳群とも確認されているのは20基以下と小規模で、下小坂古墳群では木炭槨や横穴式石室を持つ円墳や、前方後円墳が調査されている。南大塚古墳群でも、横穴式石室を有する円墳や帆立貝式前方後円墳など一部が調査され、内容が明らかとなっている。

7 北足立郡域の群集墳

荒川下流左岸域を中心とする北足立郡域は、後期古墳群の数はそれほど多くはない。

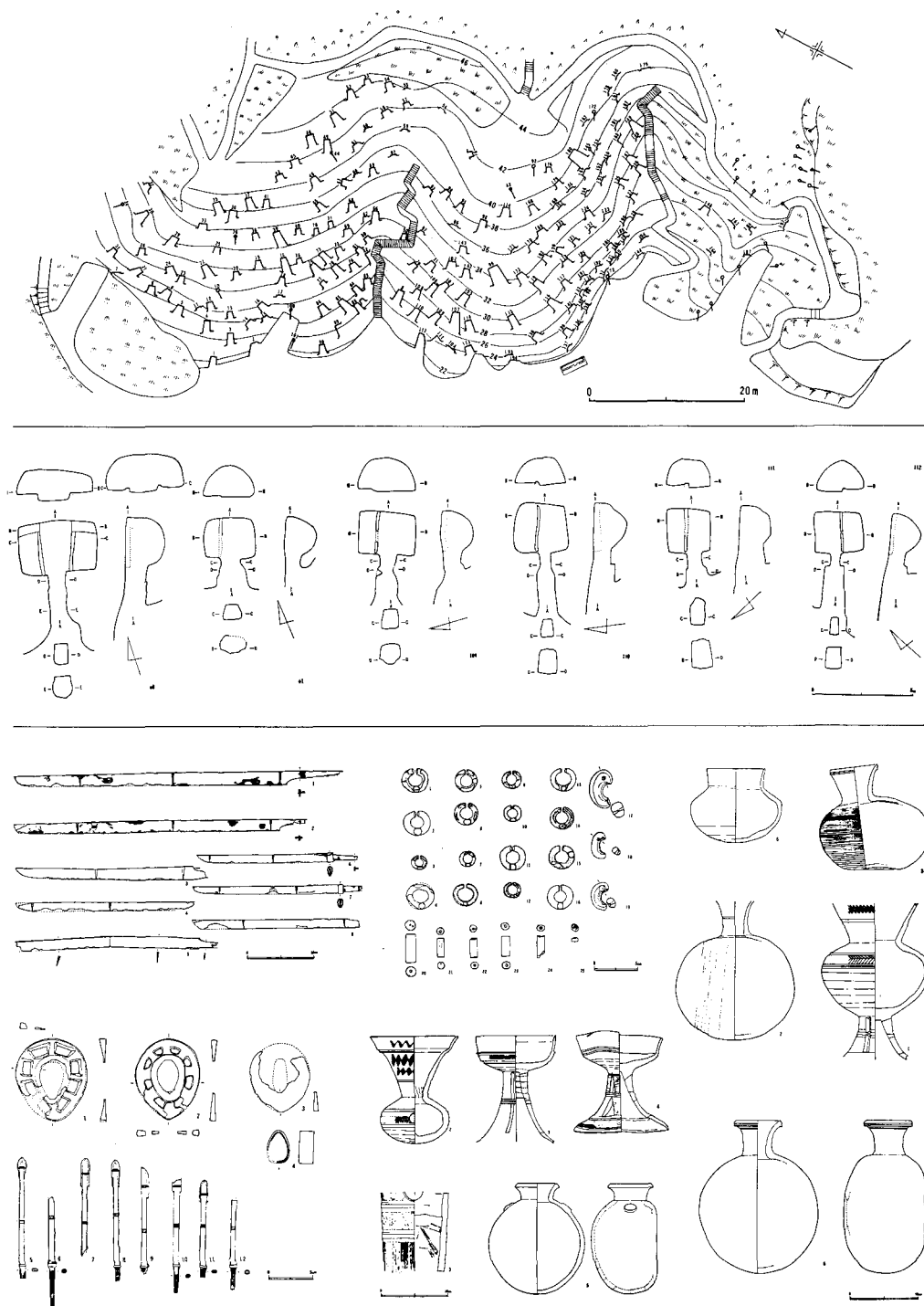
荒川を西に望む桶川市川田谷の大宮台地西縁部には、1km以上にわたり川田谷古墳群⁽¹⁰²⁾が築かれている。約40基が現存するが、かつては、これに倍する数が築かれていたとされている。分布の状況から4支群に分かれ、ひさご塚古墳（第1章参照）など小形の前方後円墳を含み、他は円墳である。

西台4号墳は直径約11m、墳丘はすでに失われていたが、周堀から古式な鬼高式の土師器が出土し、6世紀前葉頃の築造と推定された。そして、西台2号墳は、直径約30m、凝灰岩切石の横穴式石室からは、直刀、鉄鏃、玉類、耳環、須恵器が出土し、7世紀初頭頃の築造であることが判明している。

また、城髪山2号墳など、凝灰岩切石の胴張式石室を主体部とする、7世紀中葉頃まで下降するものも知られている。

以上の例からすると、川田谷古墳群は、6世紀初頭頃から7世紀中葉にかけて形成されたものと考えられる。

このほか、北足立郡域では、荒川左岸の大宮台地上の箕田古墳群⁽¹⁰³⁾、馬室古墳群⁽¹⁰⁴⁾、生田古墳群⁽¹⁰⁵⁾



第15図 吉見百穴横穴墓群の分布（上）と代表例（中）及び出土遺物（下）〔註(109)の文献より転載〕

(以上鴻巣市) 側ヶ谷戸古墳⁽¹⁰⁶⁾ (群大宮市), 荒川の自然堤防上の大久保古墳群⁽¹⁰⁷⁾ (浦和市) など、6・7世紀代の古墳が調査されているが、古墳群の実体はあまり明らかでない。

8 横穴墓とその分布

北武蔵には、現在まで18箇所⁽¹⁰⁸⁾で横穴墓群の所在が確認されている。川口市東本郷横穴墓群を除けば、他は全て荒川右岸の丘陵または台地縁辺に営まれている。そして、江南町高根山横穴墓群を北限とし、荒川より北には分布していない。

以上の横穴墓群のうち、現在確認基数が最大なのは、吉見百穴横穴墓群⁽¹⁰⁹⁾の228基である。市の川左岸の所謂吉見丘陵の斜面に築かれた横穴墓群で、坪井正五郎らによる発掘調査で著名である。

この斜面は凝灰岩質で、平均約45度の急傾斜を有し、小支谷により4箇所の突出部を形成し、その全面に横穴墓が築かれている。玄室の平面形態は、正方形、縦長長方形、横長長方形、三味線様の胴張のあるものなど、8型式に分類され、棺座を有するものも多い。天井の形態も、アーチ状をなすもの、平らなものなど、6型式に分類されている。

出土遺物については、直刀、鉄鏃、玉類、耳環、土師器、須恵器、そして封鎖施設の外側に樹立されていたといわれる円筒埴輪などがある。こうした遺物群からすると、横穴墓群は6世紀後葉段階で築造が開始され、7世紀中葉頃までに形成されたものと考えられる。

吉見丘陵にはもう1箇所、その北東部、荒川を東に望む黒岩地区の谷合斜面に、黒岩横穴墓群⁽¹¹⁰⁾が分布している。

現在約70基ほどが確認されているが、一説には500基近い数との想定もなされている。

明治10年に地元の好事家に発掘され、鉄器や玉類、須恵器が出土したといわれるが、その後の所在が明らかでない。しかし、横穴墓の構造が吉見百穴横穴墓群との近親性を認めてよいので、築造時期についてもほぼ同様に想定してよいのではないと思われる。

これ以外の横穴墓群では、比企丘山横穴墓群⁽¹¹¹⁾が40～50基と推定され、滝之城、吹上の各横穴墓群⁽¹¹²⁾では、9基が発掘調査されているほか、実体が不明なものが多い。築造時期についても、些少な出土遺物から、滝之城横穴墓群が7世紀中葉前後、吹上横穴墓群が7世紀中葉から後半にかけての時期が考えられるほか、不明といわざるを得ない。

ところで、比企地区における横穴墓群の出現の理由について、同地区の後期古墳の横穴式石室に胴張構造が新たに採用された原因と共に、これを渡来系氏族の吉志氏の移住を想定して説明しようとする考えが、金井塚良一氏⁽¹¹⁴⁾により提出されている。吉志氏の移住を、武蔵国造職をめぐる争乱後に設置された横渟屯倉の管掌者としての進出と説明しようとするものである。

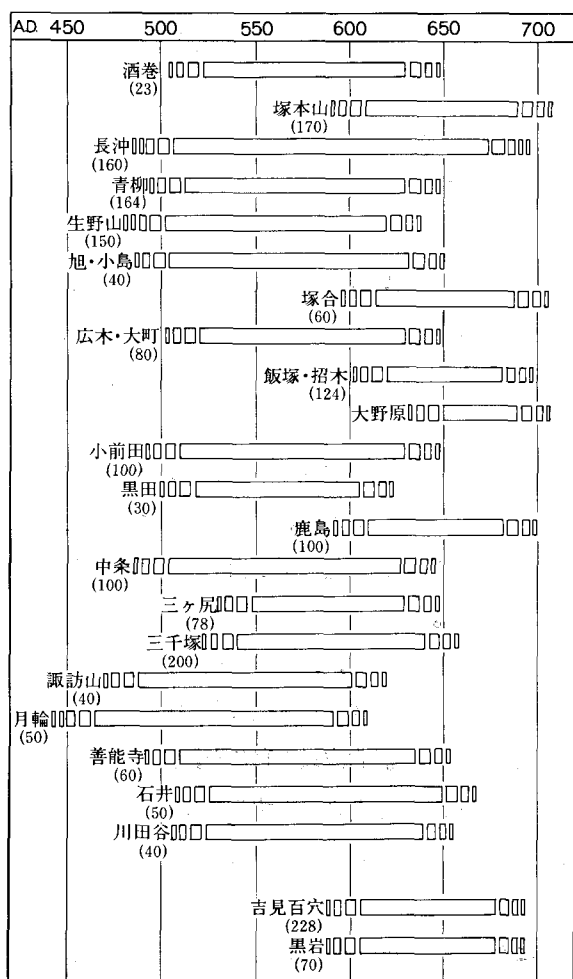
また、その具体的な根拠として、原島礼二氏により、吉志氏の本貫地である摂津、難波の地名(郡、郷名)が横渟屯倉の推定地である旧横見郡(現在の比企郡北東部、吉見町付近)に認められると指摘されていること、及び難波の周辺にも横穴墓が存在していることなどである。傾聴すべき見解だが、吉志氏の本貫地の詳細な同定と、遺構、遺物面からの考古学的な検証がさらに必要と考えられる。

9 群集墳の消長と古墳の終末

後期群集墳の築造状況を概観したが、群を構成する古墳の数や主体部、築造の継続時期など、各様なところがあると推定される。

しかし、比較的大規模な群集墳について、その築造開始の時期に着目するならば、巨視的には5世紀後葉から6世紀前葉頃、すなわち、おおまかにいって、西暦500年前後頃に生起し、7世紀代まで築造が継続するもの（以下「500年前後型」と呼称する）、及び6世紀末から7世紀初頭頃に生起し、ほぼ7世紀代全般にわたり築造が継続するもの（以下「600年前後型」と呼称する）の二者の存在を認めてよいだろう。⁽¹¹⁶⁾

「500年前後型」は三千塚古墳群や長沖古墳群など、半数以上はこの類型であろう。群の中核に前方後円墳を含むものも多い。一方「600年前後型」は、塚本山古墳群、鹿島古墳群、吉見百穴横穴墓群などで、群中に前方後円墳を含まない古墳群である。



第16図 北武蔵の主要後期群集墳の消長
〔（ ）内は現確認数〕

この二者の生起のパターンは、埼玉郡域に集中して築かれている、北武蔵域を統括した大首長墓である、大形前方後円墳の消長とも関連がありそうである。

「500年前後型」の出現は、まさに大形前方後円墳の稲荷山古墳が出現した時期と符合するものであり、武蔵の大首長の権勢下に組入れられた氏族集団の有力者が形成したものと判断される。

そして、「600年前後型」は、同じく、將軍山古墳や真観寺古墳など、武蔵の最高首長層間で前方後円墳の築造が停止されようとする状況下で、築造が開始されるのである。これは、畿内政権との新たな政治体制を志向した武蔵の最高首長層が、自己の権力の伸長のため、新たにその政治的傘下に編成した集団の首長たちが築造したものと推定することができよう。

支配者首長層の有力古墳の築造が

停止される7世紀後半代、群集墳についても序々に築造が停止されていった。塚本山7号墳や鹿島34号墳など7世紀末葉前後と考えられる古墳は、群集墳中でも最も新しい時期のものだが、古墳としてもまさに最終末の時期に位置している。律令的な身分秩序が、支配者首長層ばかりでなく、群集墳を築いた首長層間にも徹底され、北武蔵の古墳時代も終焉の時を迎えたものと考えられる。

3. まとめにかえて

古墳時代後期の北武蔵における、前方後円墳をはじめとした主要古墳、古墳群の築造状況について述べてきた。

繰り返すことになるが、同域の古墳時代後期の際立った特色の一つに埼玉古墳群とその周辺地区に築造された大形前方後円墳がある。前代まで、大形古墳の築造をみなかった北武蔵域に、大形前方後円墳が継続的に築造されたのは、当時強大化した毛野の大首長層の動向を踏まえ、畿内政権が埼玉古墳群と周辺地区の豪族層の伸長を助成したとするのが、一義的な解釈である。

こうした状況の中で7世紀初頭前後、畿内政権による前方後円墳の築造を規制する動きがあったものと思われ、前方後円墳の築造が停止された。

前方後円墳を築いてきた首長層はその墳墓の形式を、伝統的な前方後円墳から、方墳又は円墳へと転換するとともに、墳丘規模の大幅な縮小化を余儀なくされた。そして、8世紀初頭頃までに、中小の首長層を含め、彼らの間でついには古墳築造の停止が行われたのである。

北武蔵は有力者層の古墳築造の停止と前後し、再び、政治的に等閑視される地域に逆戻りしていったものと思われる。それは後の国府や国分寺が、南武蔵の地に築かれていることや、一時期、趨勢を誇った埼玉古墳群周辺に、大形古墳と時期的にオーバーラップするか、または後続する、初期寺院跡がみられないことなどからも窺える。

中小の前方後円墳は、大形前方後円墳の被葬者に従属する豪族層の古墳と考えられるが、後期の中小前方後円墳の実体は、いまひとつ明らかでない部分が多い。それらの解明は、初期古代寺院跡の実体などとともに今後の課題として残されている。

資料の利用等で、下記の機関、方々に助力をいただきました。文末となりましたが記して謝意を表します。

県立さきたま資料館、同歴史資料館、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大谷徹、金井塚良一、栗原文蔵、斉藤国夫、塩野博、田中広明、田中正夫、富田和夫、中島利治、吉川國男、若松良一

註

(1) 和島誠一・甘粕健「古墳時代」『横浜市史 第1巻』横浜市1958

(2) 武蔵域では、主軸長が100mを超えるものを一応の目安として「大形前方後円墳」と呼んでよいだろう。

なお、帆立貝式古墳については、前方後円墳及び造出付きの円墳に分離すべきとの遊佐和敏氏の見解に従う。

遊佐和敏『帆立貝式古墳』同成社1988

(3) 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会1980

(4) 白石太一郎「年代決定論(二)」『岩波講座 日本考古学1』岩波書店1985

(5) 『二子山古墳』埼玉県教育委員会1987

(6) 甘粕健「武蔵国造の反乱」『古代の日本 7』角川書店1970

(7) 『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会1986

(8) ①柴田常恵「武蔵北埼玉郡埼玉村將軍塚」『東京人類学会雑誌 第231号』東京人類学会1905

②『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会1988

③金井塚良一「埼玉將軍山古墳の性格をめぐる」『埼玉の考古学』新人物往来社1988

(9) 下記文献中の岩崎卓也、中村浩氏の編年表による。

『東京国立博物館図版目録古墳遺物編(関東編Ⅱ)』東京国立博物館1986

(10) 毛利光利彦氏は將軍山古墳出土銅鏡を6世紀末～7世紀前半の所産とされた。(「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌 64-1』日本考古学会1978)

また、金井塚良一氏は將軍山古墳の銅鏡を「推古朝の積極的な北武蔵介入と全く無関係に出現したとは考えられない」とし同古墳を7世紀初頭頃の築造と推定された。(「推古朝と北武蔵の銅鏡」『歴史と人物 12月号』中央公論社1979)

(11) ①高木豊三郎『史蹟埼玉』埼玉村教育会1936

②杉崎茂樹「行田市若王子古墳について」『古代 第82号』早稲田大学考古学会1986

(12) (8)②に同じ

(13) (6)に同じ

(14) 丸墓山古墳を埼玉古墳群の最高首長系列の古墳と考えるならば、まず第一に畿内政権による規制が想定できる。

さらに、一步ふみこんで安閑期の武蔵国造家の内乱の首謀者である小杵の墳墓に擬そうとする仮説が吉川國男氏により提示されている。(1987年1月1日付「埼玉新聞」)

(15) 既に増田逸朗氏が指摘するところである。

増田逸朗「辛亥銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群」『考古学ジャーナル 201』ニュー・サイエンス社1982

また、埼玉古墳群の首長間の政治的關係が、樹立されていた埴輪の突帯数に表象されるとする、同氏の卓見がある。

増田逸朗「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社1987

(16) 『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会1987

(17) ①『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会1986

②『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市教育委員会1988

③『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会1989

(18) (17)③に同じ

(19) (17)③に同じ

(20) (11)①に同じ

(21) ①大野延太郎「武蔵北埼玉郡小見ノ古墳」『東京人類学会雑誌 第156号』東京人類学会1899

②「小見真観寺古墳」『史蹟調査報告 第7集』文部省1935

(22) 板石の中央を削り貫いて玄門とする横穴式石室は栃木県国分寺町周辺に認められる。また、二枚の板石を「L」字状や「コ」の字状に加工して組み合わせた物を玄門とする横穴式石室が茨城県筑波市周辺及び千葉県佐原市周辺に所在しており、こうした地域との関連が注目される。これらの古墳については下記の文献を参照されたい。

「丸塚古墳」『栃木県史 資料編 考古二』栃木県1979

『平沢・山口古墳群調査報告』筑波大学考古学研究会1982

安藤鴻基ほか「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」『古代房総史研究 第2号』古代房総史研究会1983

- (23) ①「真名板高山古墳」『埼玉県指定文化財調査報告書 第11集』埼玉県教育委員会1976
 ②「県内主要古墳の調査」『調査研究報告 第1集』埼玉県立さきたま資料館1988
- (24) ①塩野博「天王山塚古墳について」『埼玉考古 第16号』埼玉考古学会1977
 ②若松良一「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」『土曜考古 第6号』土曜考古学会1982
- (25) 『とやま古墳』埼玉県教育委員会1967
- (26) 『新編埼玉県史 資料編2』埼玉県1982
- (27) 栗原文蔵, 塩野博「埼玉県羽生市永明寺古墳について」『上代文化 第38集』國學院大学考古学会1969
- (28) 齊藤国夫『虚空蔵山古墳』行田市教育委員会1984
- (29) (26)に同じ
- (30) 菅谷浩之, 駒宮史朗「生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1973
- (31) 田村誠『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅲ』神川村教育委員会1984
- (32) 『いぶき8・9合併号』埼玉県立本庄高等学校考古学部1975
 なお、以下にあげた長沖十兵衛塚古墳以下の4古墳についても同書にその測量図や観察が記載されている。
- (33) 亀井正道「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム 316号』東京国立博物館1978
- (34) 貞末堯司「熊谷市瀬戸山古墳の調査」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1973
- (35) (26)に同じ
- (36) (26)に同じ
- (37) (32)に同じ
- (38) (32)に同じ
- (39) (23)②に同じ
 同じく、荒川左岸、熊谷市横塚山古墳も帆立貝式前方後円墳の可能性がある。
 増田逸朗『横塚山古墳』埼玉県遺跡調査会1971
- (40) 甘粕健「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武蔵考古資料図鑑』校倉書房1976
- (41) 金井塚良一「比企地方の前方後円墳」『研究紀要 第1号』埼玉県立歴史資料館1979
- (42) 『三千塚古墳群発掘調査中間報告』三千塚古墳群調査会1962
- (43) (42)に同じ
- (44) (42)に同じ
- (45) 金井塚良一ほか『柏崎古墳群』考古学資料刊行会1968
- (46) (45)に同じ
- (47) 入間地域の方後円墳については下記の基礎的研究がある。
 金井塚良一「入間地方の方後円墳」『研究紀要 第2号』埼玉県立歴史資料館1980
- (48) 『川越市史 第一巻 原始古代編』川越市1975
- (49) (48)に同じ
- (50) (26)に同じ
- (51) (26)に同じ
- (52) 田中広明・大谷徹「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」『研究紀要 第5号』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1989
- (53) 塩野博「川田谷ひさご塚古墳」『桶川町文化財調査報告書Ⅱ』桶川町教育委員会1969
- (54) (26)に同じ
- (55) 山崎武『下関遺跡』鴻巣市教育委員会1981
- (56) 小見真観寺古墳などとともに埴輪を持たない終末期の方後円墳の時期を設定できるかもしれない。
- (57) (23)②に同じ

- (58) 『八幡山古墳石室復原報告』埼玉県教育委員会1980
- (59) 塗漆木棺や銅鏡などの副葬品を根拠に八幡山古墳を『聖徳太子伝暦』にみえる、西暦633年に武蔵国造に任じられた物部連兄麻呂の墳墓とする見解も提出されている。
原島礼二「大和玉権と武蔵国造」『新編埼玉県史 通史編1』埼玉県1987
- (60) 『地蔵塚古墳保存整備工事報告書』行田市教育委員会1986
- (61) 栗原文蔵「古代壁画の新資料」『上代文化 第33集』國學院大学考古学会1963
- (62) ①寺社下博・金子正之「熊谷市大塚古墳の第1次調査」『第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1983
②寺社下博「熊谷市大塚古墳の第2次調査」『第18回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1985
- (63) 『冑塚古墳』東松山市教育委員会1964
- (64) 『東松山市史 資料編1』東松山市1981
- (65) 『吉見町史 上巻』吉見町1978
- (66) ①芹沢範子・長内順子「穴八幡古墳の石室」『台地研究No.19』台地研究会1971
②(52)に同じ
③高橋好信「小川町穴八幡古墳の調査」『第22回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1989
- (67) 吉見町茶臼山古墳、岡部町稲荷塚古墳、小川町行人塚古墳など7世紀代の方墳と推定されるものがあり、類例は増加することと思われる。
なお、川越市山王塚古墳や熊谷市宮塚古墳は上円下方墳といわれるが考古学的な調査が不十分な現状では、両古墳の評価にはなお慎重を要する。
- (68) 白石太一郎「畿内における古墳の終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告 第1集』国立歴史民俗博物館1982
- (69) 埼玉郡の東側に古利根川を隔てて接する北葛飾郡(現埼玉県)には、前方後円墳の瓢箪塚古墳を中心とする目沼古墳群が存在しているが、同郡は旧下総国域に属する。
①大塚初重「埼玉県北葛飾郡瓢箪塚古墳」『日本考古学年報 5』日本考古学協会1957
②『杉戸町目沼遺跡』杉戸町教育委員会1964
③蚊爪良祐「杉戸町目沼古墳群4・5・6号墳発掘調査報告」『埼玉考古 第6号』埼玉考古学会1968
④横川好富『目沼8・9号墳』杉戸町教育委員会1981
- (70) ①斉藤国夫「酒巻古墳群」『行田市北西遺跡群発掘調査報告書』行田市教育委員会1982
②斉藤国夫ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会1987
③中島洋一ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会1988
- (71) 「塚内4号墳」『春日部市史 第1巻 考古資料編』春日部市1988
- (72) 『加須市史 通史編』加須市1981
- (73) (26)に同じ
- (74) 『塚本山古墳群』埼玉県教育委員会1977
- (75) 菅谷浩之ほか『長沖古墳群』児玉町教育委員会1980
- (76) 菅谷浩之ほか『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会1973
- (77) (30)に同じ
- (78) ①菅谷浩之ほか『広木大町古墳群発掘調査概報』美里村教育委員会1975
②市川修ほか『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会1980
- (79) 『本庄市塚合古墳群調査報告書』本庄市教育委員会1969
- (80) 『旭・小島古墳群発掘調査報告書』本庄市教育委員会1982
- (81) 亀倉貞雄ほか『飯塚・招木古墳群発掘調査報告書』飯塚・招木古墳発掘調査会1982
- (82) 大塚初重「埼玉県秩父市原谷第1・第4号墳」『日本考古学年報 8』日本考古学協会1959
- (83) ①田中一郎「金崎古墳群」『埼玉県指定文化財調査報告書 第12集』埼玉県教育委員会1980
②柿沼幹夫「秩父郡皆野町金崎古墳群大塚3号墳の石室について」『紀要8・9』埼玉県立博物館1983
- (84) 柳田敏司「秩父市大野原出土の蕨手刀」『埼玉考古 第2号』埼玉考古学会1964

- (85) 増田逸朗『上ノ台遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1981
- (86) 『鹿島古墳群』埼玉県教育委員会1972
- (87) 駒井和愛・吉田章一郎「寄居町塚屋古墳群調査概要」『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』埼玉県教育委員会1973
- (88) 中川成夫ほか「埼玉県大里郡花園村の考古学的調査」『史苑 18—2』立教大学1958
- (89) 滝瀬裕之『小前田古墳群』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986
- (90) 小久保徹ほか『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1983
- (91) ①寺社下博『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会1981
②寺社下博『女塚』熊谷市教育委員会1983
- (92) 塩野博ほか『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会1975
- (93) (42)に同じ
- (94) 金井塚良一ほか『諏訪山古墳群』考古学資料刊行会1970
- (95) 若松良一ほか『諏訪山33号墳の研究』1987
- (96) ①東京大学考古学研究室「埼玉県宮前村の古墳」『考古学雑誌49—4』日本考古学会1964
②立石盛詞ほか『屋田・寺ノ台』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1984
- (97) ①今井堯・橋口尚武「坂戸市入西石塚と出土遺物の研究」『坂戸風土記第14号』坂戸市教育委員会1988
②『坂戸市遺跡群発掘調査報告書 第1集』坂戸市教育委員会1988
③(51)に同じ
- (98) 田中一郎「新町古墳の調査概報」『考古学雑誌 45—4』日本考古学会1960
- (99) (26)に同じ
- (100) (48)に同じ
- (101) ①『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県教育委員会1974
②城近憲市「川越市南大塚古墳群の調査」『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1987
- (102) ①塩野博ほか『西台遺跡の発掘調査』桶川町教育委員会1970
②塩野博ほか『川田谷古墳群』桶川市教育委員会1978
- (103) ①金井塚良一ほか『宮登古墳の発掘』鴻巣市教育委員会1959
②塩野博「鴻巣市箕田古墳群箕田三号墳の調査」『埼玉研究 第11号』1965
③『鴻巣市史 資料編1 考古』鴻巣市1989
- (104) ①柳田敏司「滝馬室浅間塚調査概報」『武蔵野史談 3—4』1957
②柳田敏司「鴻巣市龍馬室の一古墳」『若木考古 50号』國學院大学考古学会1958
③(103)の③に同じ
- (105) 山崎武ほか『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会1981
- (106) 塩野博ほか『台耕地稲荷塚古墳発掘調査報告書』大宮市教育委員会1973
- (107) ①『埼玉大学構内本村遺跡第1次発掘調査報告』埼玉大学考古学研究会1967
②『かね山古墳周堀発掘調査報告書』浦和市教育委員会1980
③山田尚友「浦和市白銀宮腰遺跡の調査」『第22回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか1989
- (108) 「関東地方横穴墓地名表」『台地研究 No.20』台地研究会1980
- (109) 金井塚良一『吉見百穴墓群の研究』校倉書房1975
- (110) ①金井塚良一「黒岩横穴墓群研究序説」『台地研究 No.15』台地研究会1964
②金井塚良一『黒岩横穴墓群』吉見村教育委員会1969
- (111) (26)に同じ
- (112) 金井塚良一ほか『滝之城横穴墓群』所沢市教育委員会1978
- (113) ①『大和町の昔“吹上横穴墳”』大和町教育委員会1959
②竹石健二ほか『吹上原横穴墓群』和光市吹上原遺跡調査会1985
- (114) 金井塚良一「渡来系氏族壬生吉志氏の北武蔵移住」『埼玉県史研究 第3号』埼玉県史編さん室1979
- (115) 原島礼二『東松山市と周辺の古代』東松山市1977
- (116) 北武蔵の大規模群集墳の二つの類型についてはすでに下記の論文で触れた。

杉崎茂樹「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代 第87号』早稲田大学考古学会1989

- (117) 埼玉古墳群に隣接して所在する盛徳寺跡の創建は8世紀後葉以降と考えられる。

ちなみに、北武蔵域で7世紀代の創建の可能性のある古代寺院跡には、寺谷廃寺（比企郡滑川町）や勝呂廃寺（坂戸市）がある。しかしそのいずれの付近にも内容の確実な古墳時代後期以降の大形古墳は存在していない。なお、北武蔵の古代寺院跡の概要については下記を参照されたい。

『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室1982

（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 国立歴史民俗博物館特定研究研究協力者）

SUGISAKI Shigeki

At first, the author overviews how keyhole-shaped tumuli were constructed during the later stage of the Kofun Period.

Most of about 90 keyhole-shaped tumuli in northern Musashi seem to have been constructed in the later tumulus period, when construction of tumuli of this type increased dramatically.

In particular, it deserves special mention that some of the largest keyhole-shaped tumuli in the whole country at that time appeared suddenly in the Sakitama Tumuli Group in Gyôda City and the surrounding area in the north of Saitama Prefecture, where there had been no tumuli of remark up to the previous period; and that the construction of large keyhole-shaped tumuli continued for about a century. From the preeminent scale of their mounds, those buried are presumed to have been the highest chiefs of the newly-arising northern Musashi area, who ruled a wide area, and who were supported by the government of Kinai.

In addition, in the later Kofun period, a large number of small- and medium-sized keyhole-shaped tumuli appeared in various areas. These are thought to have been the tumuli of chiefs of sub-areas, ranking under the large keyhole-shaped tumuli. It may be understood that there was a transition from conventional scallop-shaped or round tumuli to keyhole-shaped tumuli.

However, at the end of the 6th century, or at the beginning of the 7th century, the construction of keyhole-shaped tumuli of any scale stopped. Instead, influential chiefs adopted large, round or square tumuli for their tombs. This movement coincided with the disappearance of keyhole-shaped tumuli of chiefs in Kinai, and subsequent tomb building activities, which indicates that the principle of control by local powers through the shapes of tombs, still remained effective.

Next, the prosperity and decline of group tumuli in the later tumulus period tells of the rise of small chiefs in northern Musashi. It was not uniform, but it showed individuality; some appeared simultaneously with the start of construction of large keyhole-shaped mounds; others appeared almost simultaneously with their extinction. The period during which the construction of group tumuli ceased also varied, but the construction of group tumuli in the main had come to a stop around the end of the 7th century.

These phenomena meant, at the same time, the discontinuation of the construction of tumuli, that is, the end of the Tumulus Period. Behind this is the fact that the rule of local powers through the funeral system with tumuli was reduced to a mere formality, both for the government in Kinai and for local powers.

In other words, the spread of the statute-based status system, which replaced the above rule, was forecast.